

---

# 星魔導伝説

マテマテフェイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星魔導伝説

### 【著者名】

マテマテフロイ

Z8560M

### 【あらすじ】

突如ミッドチルダ内で起きた謎の事件

そして新世界の鍵として、レイジングハートが奪われる

## プロローグ新世界への鍵（前書き）

これは続・聖剣士伝説リリカルなのはの続きです

## プロローグ新世界への鍵

第1管理世界ミッドチルダその世界では最近妙な事件が起きていた  
「これでもう被害者は7人目か…」

「でも相手は何が目的なんだろうね。リンクアーコアでもデバイスで  
もないし金目当てでもなさそうだけど」

「なにがどうあれ向こうの考えは読めねえんだ。今はこいつして少し  
でも情報を集めるしかねえだろ」

スウェンが言うと携帯が鳴る

「聞こえる？スウェン、なのは」

「どうかしたのかフェイト？」

「今8人目の被害者の場所にいるんだけど…殺されてるんだ」

フェイトの言葉に驚き、スウェン達は向かう

「どうとう人殺しか…」

スウェン達の目の前にはすでに息絶えた魔導師が倒れていた

「ますます何が目的かわからねえな」

「なにも奪われてないもんね」

なのはが魔導師を触つていると突然なのはを捕まえる

「ようやく見つけた…レイジングハート」

「あいつの狙いはなのはじやなく、レイジングハートか」

スウェンは男にバインドをかける

「これで身動きはできないだろ…お前の狙いはなんだ」

「我々の世界、星降る世界」

男が言うとレイジングハートは消える

「あれは鍵…新たな新世界を開ける為の」

「新たな新世界だと…どう言う事だ」

スウェンが聞くが男はそれ以来ピクリとも動かなかつた

レイジングハートが奪われて1週間。犯人は相変わらずわからないままだつた

「どうだユーノ、追跡できそうか?」

「一応いろいろな方法試しているんだけど…」これも駄目か「ユーノは色々考えながら、犯人の足取りを追つていた

「さて、どうする」

「一応、コウ君が捜索はしてくれてるんやけど、なかなか見つからないらしいんや」

「コウでも探し出せないとなると…結構凄腕だな」

スウェンが言うとフェイトが来る

「どうだつた犯人わかつた?」

「全然だな。何より情報が少なすぎる」

「確かに、もう少し特徴がもう少しあはつきりとわかればまだ探せるけどね」

ユーノが言うとなのはから連絡が入る

「スウェン君、フェイトちゃんちょっと来てくれる?」

「人はわけのわからないまま指定された場所へと来る

「あなたですね。我々の事を嗅ぎまわつている鼠は…」

「お前達の目的それと名を名乗れ」

「我々の目的は星降る世界へ行く事です」

「その為にレイジングハートが必要なのか?」

男は頷く

「そして後一つバルディッシュが必要なのです

「…」

男はフェイトに手を伸ばすがスウェンに止められる

「フェイトに触れるな…！」

「なるほど…」

男は笑いながらスウェンを見る

「私の名は、ゼッカ・シャベルンまた会える日を楽しみにしてますよ。

スウェン・レイク

「何故、俺の名を…」

スウェンは止めようとするがすでに消えていた

## 第2話 一人で過ごす時間

「くそ…逃がしたか…」

スウェンはゼッカが消えた方を見る

「今は彼らの目的が分かつただけでも良しとしよう」

「そうだな…それじゃ今のデータをユーノに送つておく  
スウェンはクライスソウルを使いユーノにデータを送る  
「これでひとまず安心だな！？」

スウェンがフェイトの方を振り向くと、左腕に激痛が走る

「うわああああ

何とか、痛みを抑えようとスウェンは左腕を抑えるが、痛みは治まらず、変な紋章が浮かび上がる

「ハアハア…なんだこの紋章…」

「スウェン平気？」

「何の問題もない。すぐに時空管理局に戻るぞ」

スウェンは言うが明らかに体調は優れていない顔だった

「スウェンあまり無理しても駄目だよ。クロノやユーノに私から言つておくから一度家に帰ろう」

「だが奴らの目的がはつきりした以上このまま行動を起さない訳には…」

「私はスウェンに死んでほしくもないし、無理をしてほしくないんだよ！…」

フェイトに言われスウェンは自分達の家へと戻る

「済まなかつたフェイト。俺はまた自分自身のせいだ、大切なものを無くすところだった」

「わかつてくれればいいよ。もう無茶はしないでね」

「ああ、約束するよ」

「絶対だよ。私を置いてかないでね」

フェイトはスウェンを見て言う。スウェンはその後笑顔で絶対に…

と言つて布団に入る

「ぐうう…なんだこの痛み誰かとシンクロしてるのであるのか？」

スウェンは左腕を掴みながら言つ

「どうしたのスウェン！？」

「来るな… フェイト」

スウェンの左腕から出る光は真っ直ぐになのはの入院している病院へと続く

「うわあああああああ」

「スウェン… 今、助ける…！」

フェイトはバルディッシュで斬りかかるが弾かれる

「クッ… AMFそれもかなり高性能の…」

「止める… フェイト死にたいのか…」

スウェンの言葉を感じ取り、フェイトはスウェンを見上げる

「スウェン… またどこかへ行くの？」

「平気だ。フェイト… 何時だつてどんな時だつて繋がつてゐるからな」

スウェンはだんだんと光になつて行く

「なのはが目を覚ましたら渡してくれ…」

「でも… スウェンそのデバイスは、選ばれた者にしか使えない筈…」

「きっと、なのはならそいつの真の力を使いこなせる筈だ。今のはならな…」

スウェンは光になりその場にはクライスソウルだけが残つた

### 第3話星降る世界の伝説

あれから1週間なのはは回復し、時空管理局へと来ていた  
「それでどこまでわかつてゐるの?」

「奴らの目的は大体わかつた」

ユーノは後ろの画面にある書物に書かれた事を出す  
「聖なる星光の光と闇を切り裂く雷光の雷束ねる時、未知なる次元  
が開かれん」

ユーノが言うとみんな驚く

「でも私達が一人のデバイスを持つても何も起りませんでしたよ  
「おそらくもう一つ鍵がいるんだ起動コアともいづべき鍵が…」

ユーノはその後ある仮説を出す

「僕の考えが正しければスウェンの力は必須だ。そしてなのはどフ  
エイトどちらかの血が必要なんだ」

「それどういう事?」

「簡単に言つと聖剣士の力は想いを力に変えるものだとわかつたよ  
ね。それと同じく一人の持つてゐるデバイスもそれとほぼ同等の力  
が出せるんだ」

「だがその代わり魔導師は死ぬ。それが今、俺たちがここにある資  
料全部使って作り上げた仮説だ」

コウが言つと皆静まり返る

「それも少し違うだ。ユーノ」

突然、スウェンの声が聞こえる

「びっくりさせて悪い。俺の意識は今なのはと共にあるんだ  
「それどういう事?」

フェイトに聞かれスウェンは話す

「俺はあのままじゃあいつらの言いなりだつた。そしてそれを回避  
するにはこれしか手がなかつたんだ」

「でもなんでなのは?」

「なのはの右腕を見る。俺と同じ紋章がある筈だ  
スウェンに言われたとおり右腕を見ると確かにあった  
「それと星降る世界の伝説を話してやるよ。俺は元々この世界の人  
間じゃない」

その後色々な事を話す

「つまりスウェンはその星降る世界の人間なんだ  
「ああ、だから聖剣士の力が俺にはあるんだ  
「でもどうやってこの世界にきたの？」

「さあな、それに俺は戻りたいとも思わないし何よりあの星は危険  
だ」

スウェンが言うとゼッカが来る

「やはりあなたはあの世界の住人でしたか」

ゼッカはなのはに近づく

「クッ…なのはの体じゃ抵抗もできないか…」

「どうしたのですか。スウェン・レイク」

なのはを掴みゼッカは言つ

「私はあなたの意識だけ欲しいのですよ  
「なにつ！？」

ゼッカが腕をなのはの頭の前に出すとスウェンの意識が飛び出す

「我の目標は達成した。フフフハハハハ」

ゼッカは笑いながら消える

## 第4話開かれし次元の扉

「みんな無事か…」

「私達は平氣だけどスウェンとバルディッシュが…」「まざいな…スウェンだけならまだしもバルディッシュまで取られるとは」

「ウ達は悩む

「でも実際にどんな事が起きるの?」

「僕達の予想ではこの世界を崩壊させるほどの次元震が起きる筈だ」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

遂に新世界への扉が開かれる

## 第5話呪われし名

「ハハハ… 我が求めた新世界が我の前にクククハハハ…」  
ゼッカは笑いながらスウェンを見る

「貴様のその名レイクは、呪われし名なのだろう?」

「貴様… 一体どこまで知っている」

「さあどこまでだらうな。それに、この事実を知つても彼らはまた手を差し伸べてくれるかな」

「……」

スウェンは黙る

「まあ今となつては些細な事だがな」

「俺は…」

「貴様の呪われし力、その力は全ての人々に不幸を呼ぶ。今すぐ命を絶つ事を勧めるがね…」

「確かにこの力で多くの人間を傷つけてきた。だがこの力は人々を救う事もできるだから俺は…」

ゼッカはスウェンを転移させる

「貴様たちの絆、見せてもらう。我的探すものは貴様らの中にもあるかもしれないからな…」

スウェンが消えた後、ゼッカは次元の扉を閉め星降る世界へと行く

「スウェン無事だったんだね…」

「俺が生きているせいでこんな事になつたんだ」

「スウェン君は悪くないよ。それに世界は崩壊しない」

「だが俺は… これ以上この力で関係のない人々を巻き込みたくない

「…」

スウェンは涙を流しながら言つ

「だからもう終わらせよう」

「そして新しい一步を踏み出すんだ」

「なのはとフヨイトは言つ

「お前の生まれがどうであれ、お前は俺たちの仲間だ」

「そうやで。それに私たちが力を合わせれば何でもできるんや」

「確かに人一人の力は弱いけど、それを大きくするのは想いだからね」

「みんな…まだ俺に力を貸してくれるのか」

スウェンが言うと皆は笑う

「そうだよ。まだ僕達は滅ぼされる訳にはいかない」

「多くの人が守ったこの世界今度は僕達が守るんだ」

「行こう…私達の住む場所を守るために…」

「メシアやノルンが愛した星を守るために俺は今一度この力を使う…！」

スウェンは決心をし空を見上げる

「だが今は崩壊を止める事が最優先だな…」

「でもどうやつて…？」

なのはが聞くと空から消えた筈のノルン、メシア、スサノオが来る「この次元世界終わらせはしません」

「我の愛したものを作度は壊させはせん…！」

「スウェン、次元世界の事は僕達に任せ君達は急いで星降る世界へ行くんだ」

「わかった…メシア、ノルン、スサノオここは任せた」

スウェン達は先を急ぐ

「なのは、フェイトあなた達に渡すものです」

「これは…レイジングハートにバルディッシュ？」

「スウェンの事よろしくお願ひしますね」

「はい！」

なのはとフェイトも返事をしてスウェン達の後を追う

## 第6話 星の鼓動

スウェン達は星降る世界へと来た  
「本当に星が降り注いでる…」  
「スウェン、一体どこにいると思う?」  
「場所は判明している。だがそこに行くまでの道が分からない」  
スウェンが言うとなのはの持つレイジングハートが光りだす  
「いきなりどうしたの…」  
「なのは腕を見せてくれ」  
スウェンが腕を見ると星の人の紋章が浮かび上がっていた  
「これで奴の後を追う事が出来る」  
「どう言つ意味?」  
「なのはの腕に出てる紋章は実際は俺にもあつたものだ」  
スウェンが説明すると納得する  
「だがなのはその紋章一歩間違えば死ぬからな」  
「平気だよ私にもわかるこの星はもうすぐ死ぬ…」  
「何だと…」  
「何か問題でもあるの?」  
フェイトが聞くとスウェンは再び説明する  
「この星が死ぬと他の星も消滅していく」  
「それじゃいすれはミッドチルダも…」  
「まことに…なのは完全に止まるまでどれくらいの猶予がある?」  
「後4時間29分ぐらいかな」  
なのはが言つとスウェンは考える  
「それまでに何とかゼッカを倒しコンタクトを取らなければ…」  
「だがどちらにせよ時間がないのだろう」  
「そもそもじうじうしてるとこの星の鼓動は弱まつとるやう」  
はやて達に言われスウェンは最短ルートを割り出す  
「ここから先、死人が出るかもなだが俺たちには時間がない。ここ

は強行突破で行くぞ

「でも誰が戦闘するの?」

「俺とフェイトそれにコウで敵は倒すだが無茶はするなよ」

スウェンが言つと皆、頷く

「必ず守り通す皆が笑つて過ごせる未来を!!」

スウェンが言うとクライスソウルは光り形を変える

「見つけたぞ…ゼッカ！！」

「案外、早かつたな」

「あれが、この世界のコア…」

「ほう、なるほど。星の力を持った者がいたのか  
ゼッカはなのはを見ながら言う

「それによく死人を出さずに来れたな」

「当たり前だろ。皆で帰らなきやならねえんだからな」

「それでは始めますか…」

「人を否定したものが勝つか、それとも人を信じた者が勝つか  
スウェンはクライスブレイカーを持ちゼッカを睨む

「さあ来い！」

「うおおおおお

スウェンは斬りかかるがゼッカは霧になり消える

「何だ手応えがない…」

「どうしたその程度か」

「グッ…」

スウェンは飛んできた衝撃波を何とか避ける

「斬れないなら遠距離魔法だ！！」

スウェンはクライスブレイカーのモードを変える

「行くぞ…シュー・ティング・ディバスター」

「そんなものでは我はやれません」

ゼッカは受け止めスウェンに撃ち返す

「何…」

スウェンは吹き飛び動かない

「がつかりだな。やはり人間など信じるに値しないものだ

ゼッカはなのは達に向けて集束砲を放つ

「えつ…そんなのは達に向けて」

「クッ…」ここからじや間にあわない」「ククク…消えろ…！」

ゼッカが言つとなのはは目をつぶるが魔力砲が届く事はなかつた  
「スウェン…！」

「そんな体でどうするといつのですか」

「グッ…負けるかあああああ」

スウェンはクライスブレイカーのバリアで何とか耐えるが、限界が  
来てるらしくバリアがだんだんと弱くなる

「消える呪われし人間がああああ」

ゼッカはさらに放出する

「もう止めて…」このままじや」

「うおおおおお」

スウェンの持つクライスブレイカーにひびが入る  
「必ず守る守り通す…！」

「何だこの魔力、奴のどこにこれだけの魔力が」

スウェンはゼッカの放つた集束砲を打ち消すが、クライスブレイカ  
ーは碎け散り残つた少しの魔力砲がスウェンの左目を貫く

「ぐわああああ」

スウェンが左目を抑えると、ゼッカに心臓部を撃ち抜かれ血を流し  
倒れる

「俺は…まだ何も…」

「フフフハハハハハハこれで奴の血は絶つた。我はこの世界で唯一無二  
の存在となつた」

「そんな…嘘だよね。スウェン目を開けてよ」

フェイトは動かないスウェンを抱き泣く

「貴様も逝かせてやるよ。そいつと同じ所へな」

ゼッカが撃とうとすると横からピンク色の魔力砲が飛んでくる

「まだ邪魔をするものがいたか」

「あなたはもう許しはしない。私の全てを持ってこの世界から滅ぼ  
してあげるよ」

「貴様にできるものならな  
「できるよなら今、証明してあげようか  
なのははレイジングハートを出しひっかへと向かう

「凄い…なのは押してる」

「どうしたのその程度。もつと楽しませてよ」

「なんだこいつの魔力、底が見えない」

ゼッカはなのはに押されていた

「今のうちにスウェンを見よう」

なのは以外のメンバーは全員スウェンのもとへ集まる

「これ生きてるんか?」

「いや即死だろ。心臓撃ち抜かれてるし」

「でもまだ一応生命反応はある。治療魔法ができればまだ行けると思ふけど」

「シャマルはおらんし、自然治癒を待つしかないんやないか  
はやて達が話していると凄い轟音が響きわたる

「どうしたのその程度ならもう決めるよ」

「何だあの魔導師、強すぎる」

「それじゃ止めと行こうか…」

なのははゼッカの動きを止める

「スター・ライト…ブレイカー…」

ピンク色の魔力砲にのまれゼッカは倒れる

「残念だけどまだ終わらない。スラッシュモード」

なのははレイジングハートを剣にしづかへ斬りかかる

「スター・ライト・メンバー!!」

「グッ…だがこの程度で我が消える訳が」

ゼッカはなのはの振り下ろした剣を抑える

「貴様らに殺される我ではないわ

「クッ…」

なのはが距離を置くと姿が変わる

「貴様らは皆殺しだ」

ゼッカが言つと背中の羽が斬られる

「何者だ…」

「魔導剣士」

「ふざけた事を…」

ゼッカは魔力砲を放つが回避され、腕を切り落とされる

「貴様あああ

「悪いな、加減できないもんで」

「調子に乗るな!!」

「俺はこんな奴にやられたのか…泣けてくるな」

魔力砲を乱反射するが一発も当たらず、もう片方の腕も斬り落とされる

「もう決めにさせひらひ。なのは、レイジングハートを渡してくれ

「うん…後はよろしくね。スウェン君

「任せとけよ」

スウェンの周りに魔力が集中する

「我はまだ消えたくない

「悪あがきはよせ。俺が今、救つてやる」

スウェンはレイジングハートを剣状態にし、投げ最後に斬りぬける

「あばよ…ゼッカ憧れの地で安らかに眠りな

スウェンがゼッカを倒すと崩壊が始まる

## 第9話新たなコア

「さてもう時間か」  
「急いで脱出しよう」  
「悪いが俺となのははまだやる事がある」  
「必ず戻るから、先に帰つてて」  
「なのはとスウェンに言われフェイト達はミシドチルダに戻る  
「でも本当にいいのか。下手をしたら帰れないぜ」  
「そうなつてもスウェン君は傍にいてくれるんでしょ」  
「まあ、そうなるな」  
「スウェンとなのははコアへと近づく  
「俺が合図したら腕を入れてくれ」  
「うん。わかつた」  
スウェンはなのはに語りつと、体の中から聖剣士の力を抜きクライス  
ブレイカーへと入れる  
「俺はこれでただの人間だ。銃で撃たれれば死ぬし、心臓を刺され  
れば死ぬ」  
「でも魔法は使えるんでしょ」  
「まあ、デバイスがあればな」  
スウェンはなのはと話しながらクライスブレイカーをくぼみに入れる  
「なのは、腕を入れてくれ」  
「うん、わかつた」  
なのはが腕を入れると魔力のカーテンが一人を包む  
「あなた達は何故、ここに？」  
「ホシガミ、お願いがある。この次元世界にはまだ色々な神祕が溢  
れている。だからこの世界の崩壊を止めてくれないか」  
「私一人の力では無理です。あなた達にも力を貸してもらいますよ  
ホシガミはスウェンとなのはを見て言つ  
「ああ、俺たちならもう覺悟はできる。この世界と運命を共にす

る準備はな

「あなた達には待っている者がいます。それでもいいのですか」

「決意は変わりません」

なのはが言うとメシアやスサノオ、ノルンが来る

「ホシガミ我々では駄目ですか」

「問題はないと思いますが、あなた方はこの世界の一部となるのですよ」

「我は学んだ。人は悪いものだけではない。それにこの次元世界終わらせるには惜しいしな」

「僕もスサノオやノルンと同じ気持ちだ。人はまだ進化できる」

ノルンやスサノオたちが言うとホシガミは納得する

「わかりました。私も人を信じます、あなた方がいるのなら平和な世界でしうしね」

「じゃあなスウェン、今度こそ本当のお別れだ」

「貴様とは一度決着をつけたかったが、こんな最期もいいだろ?」

「それではスウェン仲間達を大事にしなさい」

ノルン達は消え崩壊も止まる

「綺麗な世界だね」

「ああ、俺たちも帰るか?」

「うん!」

なのははとスウェンも帰る

## 第10話 平和の犠牲

「何とか帰ってきたんだな。グツ……!?」

「本当に平気、スウェン君」

「問題はない筈だ」

スウェンは聖剣士の力が抜けた事により、体のバランスが取れなくなっていた

「どうしても無理ならここで待つてもいいよ」

「いや、俺も行く」

スウェンは言つ事を聞かない体に鞭を打ち、なんとか歩きだす  
「でもスウェン君、無理はしない方がいいよ」

「俺なら平気だ。急いで行くぞ」

一人は時空管理局へと向かう

「ねえ、スウェン君……」

「どうしたんだなのは？」

「今でもフュイトちゃんのこと好き？」

「何だよ。突然……」

スウェンが言つとなのはは空を見る

「いやただふつと思つたから……」

「俺にもよくわからない。聖剣士の力が抜けたせいなのかは分から  
ないがなのは以外の顔を思い出せないんだ」

「それって記憶喪失？」

「まあ会えればわかるだろ？ 急ぐぞなのは」

スウェンとなのはは自分達の帰る場所へと急ぐ

「ねえ、スウェン君。私、思つたんだけどこのまま海鳴に行つて魔  
導と無関係で生きるのはどうかな」

「その選択肢もありだな。でも俺は……」

スウェンは空を見上げ涙を流す

（俺の記憶はだんだんと消えていく。いざれはなのはの事もわから

なくなるのか…)

「もう田の前だよ。急いで」

スウェンはなのはに引っ張られ、時空管理局の中へと入る

「スウェン、それには」

「ただいまみんな」

「…………」

スウェンは何もしゃべらない

「スウェン、無事だつたんだね…」

(これは…誰だ。だがこの感じは覚えてる)

スウェンは何とか思い出そうとするが、全然思い出せない

「フュイトちゃん。今のスウェン君は急いで医者に見せないとならないんだよ」

「そりなんだ。なのはは平氣なの?」

「私も一応検査だけするから、一緒に行つてくんなよ」

「よろしくね…」

フュイトに手を振りスウェンとなのはは病院へと向かう

「さつきのがフュイトちゃんだよ」

「そうだったのか…」

スウェンは目まであまり見えなくなっていた

「急いで。後、少しだから」

なのははスウェンを引っ張り病院へと入る

「あの…すいません。検査をお願いしたいんですけど」

「はいわかりました。それでは、あの奥の部屋からはいってください」

なのはとスウェンは奥の部屋に入り診察を受ける

「あなたのほうは何の問題もないですが、こっちの彼は問題が多すぎて、この病院じゃ調べきれないね」

「そうですか…わかりました」

なのははスウェンを抱え部屋を出て行く

(こんなに軽かつたけ)

なのはは疑問に思いながら、スウェンをコーンに見せる

「聖剣士の力が抜けたんだよね」

「やうだけどどうかしたの？」

「こままじやスウェンは死ぬ。 そじやないとしても全ての記憶を無くすはずだよ」

「それを防ぐにはどうすれば…」

なのはがコーンに聞くとスウェンがなのはを見て笑う

「なのは…コーン…ありがとう…」

「スウェン君まだ消えちゃだめだよ。 何の為にここまで生きたの」

「なのは…もう無理だよ」

コーンはなのはの肩を叩く

「もう彼を休ませてあげよう。 今まで僕達の為に戦ってくれたんだから…」

「でもそれじや… フェイトちゃんが…」

コーンを見ると田には涙が溜まっていた

「僕だつて悲しいよ。 でもこのまま全てを忘れるよつ、少しでも思い出を覚えて死んだ方が幸せなんだよ」

「でもそれじや… 本当の幸せとは言えないよ」

なのはが言うとスウェンはなのはの手を取る

「みんなによろしくな…」

「スウェン君私達は君の事を待つ。 だから必ず戻つてきて、絶対に

皆を悲しませないで」

「なのは達は俺にはもつたない仲間だつたな」

なのはを握っていたスウェンの手が急激に冷たくなる

「なのは… 行こうもう田覚めないよ」

コーンは出て行くがなのはは、スウェンの傍を離れずスウェンの腕を持つ

「私はスウェン君に選ばれなかつたけど、 今でもこの気持ちは変わらない。 大好きだよスウェン君」

なのはは冷たくなつた。 スウェンの唇にキスをして部屋を出て行く

## 第1-1話人が生きる意味

あれから1週間。なのはは時空管理局へ来なかつた

「なのはママ今日も」」飯食べてない」

「あれから1週間ずっと部屋に閉じこもつたまま、下手をしたら死んでいるのがもしけませんね」

セイが言つビィヴィイオは部屋のドアを呑く

「なのはママ死なないで」

「嘘ですよ。生命反応はあります」

セイはヴィイヴィオの肩を叩き言つ

「それからマスターに手紙です。一応、目を通しておいてください」

セイはヴィイヴィオを連れなのはの部屋の前から去る

「私は何をしてるんだろう。こんな事をしても何の意味もないといつのに」

なのはは部屋のドアを開け、ご飯と手紙を取る

「ユーノ君とフェイントちゃん結婚したんだ…」

なのはは涙を流しながら、次の手紙を読む

「それにコウ君にはやてちゃんか…」

なのはは次々と手紙を読み、ご飯を食べる

「私が生きている意味つてあるのかな…」

なのははじ飯を食べ終え、部屋から出である場所へと向かう

「彼が消えてから一切変わってないな」

なのはの前にはスウェンの家があつた

「本当にここでは色々な事があつたよね」

なのはは色々と思いだし、涙を流す

「初めてミッドチルダに来た時は、フェイントちゃんやユーノ君達でこの家に来たんだよね」

その時の事を思い出して笑みを浮かべる

「あの時は楽しかったな。皆でスウェン君をからかつたりして」

なのははしじばらく歩くと写真を見つける

「これってあの時の写真だよね」

その他にも周りには大量の写真があった

「スウェン君。やっぱり本当に皆の事が、好きだつたんだ」

なのはが写真を見ていると、何か光輝くものが見える

「何だろ…これ？」

なのはが手に持つたものはデバイスのようだが所々破損しており、単なる宝石のようにも見えた

「なにかはよく分からぬけど一応、持つておこう」

なのははポケットにしまい手紙を見つける

「これって彼が書いた手紙だよね」

そこに置いてある手紙はなのは宛てだった

「なんでフェイトちゃんじやなくて私に…」

なのはは封を切り、中の手紙の内容を読み涙を流す

「スウェン君…本当は私の事思つてくれてたんだ…」

その後、家を出て自分の家へと戻る

「あつなのはママお帰り」

「ようやく私の知るマスターに戻りましたね」

「ごめんね。二人とも迷惑かけて」

「お礼ならマスターを心配した全員にしなさい」

セイに言われるのは自分の部屋へと入り準備をする

「人が生きる意味。それは人それだけど、私は大切な人と歩むために生きているんだと思う。だから人はどんな困難にぶつかっても生きる希望を見失わずに生きていけるんだと思うんだ」

なのははレイジングハートを持ち時空管理局へと急ぐ

## 第1-2話奇跡の魔法

「なのは、久しぶり」「うん、おめでとうフェイトちゃん。ゴーノ君と結婚したんでしょう」「えつ…まだ付き合つてるだけだけど、それとはい。これ」フェイトに手渡されたのは七色に光る羽だった  
「これはなのはにあげるよ。もう必要のないものだから」「えつでもだつてこれは…」「私はスウェンとは友達でいいんだ」「わかつた。一応、貰つておくね」なのははフェイトにお礼をして先を急ぐ  
「でも本当にいいのかい。フェイト」「いいんだよアルフこれで…私は後悔はしない」「でもスウェンが目覚めるかが、問題だけどね」「今のはなら目覚めさせられるはずだよ。彼をね…」フェイト達はなのはのほうを見つめる  
「ようやく着いた…」なのはは部屋の前でとまる  
「今、行くからね…」なのはが入ると機械の音だけが聞こえた  
「迎えに来たよ…」なのはが触ると相変わらず冷たいままだった  
「私、あれから色々考えた。でもやつぱり私はこの世界であなたと暮らしたい」なのはの目から涙がこぼれおちる  
「私はもう一度…ずっと一緒にいたいんだ」なのはの想いに答えるようにレイジングハートが輝き始める  
「もう一度、名前を呼んで」なのはが言つとレイジングハートとポケットの中のバイスが共鳴

する

「何が起きてるの？」

なのはが驚くと田の前に色々なものが見える

「アリシアちゃんに、フロイトちゃんのお母さんそれに…スウェン君のお母さんとお父さん？」

なのはは幻覚でも見ているのかと田をこするが消えない

「大切なのは信じる心」

「そして強く願う事」

「自分自身の想いを」

「彼にぶつけてください」

アリシア達に言われなのははスウェンに向かなる

「今、はつきりとわかった。この気持ちは本物だって、だから一緒に生きようスウェン君！！」

なのはが言つとアリシア達はスウェンを囲む

「人の心の素晴らしいを見せてもらいました」

「もうこれで思い残すことは何もないわ」

「彼の意識が目覚めたら支えてくださいね」

「お互いがお互いを思えばそれが魔法だよ」

皆は笑顔になり消える

「スウェン君…」

なのはが涙を流すと暖かい手がなのはの頬を触る

「なのはの想いが、奇跡を起こしてくれたんだな」

「スウェン君。本当に夢じゃないよね」

なのはは涙をふきスウェンを見る

「お帰りスウェン君…」

「ああ、ただいまなのは…」

なのははスウェンに抱きつき泣いた

辺境の地ザンガウスそこは誰も近寄らず、遂には忘れられた場所。だがそんな場所で何かが動き出すなど誰にも予想はできなかつた

「今日でここともお別れか…」

最後に見おさめ他の世界へと急ぐ。星降り事件より2年後スウェンは世界をこの目で見る為に各世界を回つていた

「俺が皆から許可をもらつて旅をしてもう半年か」

ベンチを見つけ、座り荷物を整理する

「みんな…元気かな…」

頭の中にはなのはやユーノ達が浮かんでくる

「さてもう行くか…皆にこれ以上迷惑をかける訳にはいかないしな」

荷物を持ち立ち上がると、後ろから殺氣を感じる

「この一撃を避けたか」

「お前は一体何者だ?」

「星の断罪者」

「何…」

驚くと同時に斬られ、スウェンは血を流す

「何だ…確かに避けた筈…」

「驚いているようだな」

「お前の刀、それは一体?」

「貴様とこれ以上話す事などありはしない」

姿が消え、次の瞬間にはスウェンの目の前へと現れる

「クッ…」

何とか避けるが、前髪にかすり髪が落ちる

「中々しぶといな…聖剣士の力もないといつに」

「貴様、何故、聖剣士の事を…」

「私にも都合と言うものがある。早々に終わりにさせてもいい」

「男が踏み込むとスウェンの前に何者かが現れ斬撃を止める

「まさかこんな所で巡り合いつとはな」

「もう止めてくれゼロ。何がお前を変えたんだ」

「これも全ては星の導きだ」

「どうしても彼を殺さなければならぬのか」「言葉も聞かずに斬りかかる

「お前は何を見たんだ。あの禁断の地で」

「貴様と話す事などない。俺の使命は奴を殺す事だ」

再びスウェンへと斬りかかるが止められる

「例え貴様でも、邪魔をするなら容赦しないぞ」

「お前は何故こんなことを平然とできる?」

「俺は貴様とは違う。全ては星の民の為だ」「星の民その言葉にスウェンは覚えがあつた

「だがどうやら俺も時間のようだ」「だがどうやら俺も時間のようだ」

武器をしまいスウェン達に紙を投げる

「もし俺を追う気があるなら來い。何時でも待つててやる。それと貴様の仲間はもう俺の仲間が殺しに行つた」

「貴様……」

「だが今から行けばまだ間に合つかもな」

「転移魔法が発動しそれはその場から消える

「待て……グッ……」

傷が痛みスウェンは倒れる

「傷が痛むのか?」

「奴の太刀筋、見切つていたつもりだったが……どうやら俺もまだま

だのようだな」

「君は確かに彼の太刀筋を見切つてはいるが、それだけじゃ彼には勝てない」

「何か秘密があるのか……」

男は頷く

「だが彼の秘密を教える前に、君の仲間を助けないと。僕はロイト・クオンよろしく

「俺は高町スウェンだ。よろしくなロイトそれでのゼロとは並つ  
いう関係なんだ」

「彼と僕の事は道中で話す。今は一刻も早く君の仲間を助けるのが  
優先事項だしね」

「お前には関係ないのに助けてくれるのか」

スウェンが聞くとロイトは僕にも君に協力する意味があると言つ  
人はミッドチルダへと急いだ

## 第13話新たな旅（後書き）

### 新キャラロイドの紹介

所持デバイス、イフリート 炎を出すデバイスで剣、槍、銃の3形態に変形することが可能

性格は弱気であまり戦闘を好まない。今は訳あって、時空管理局には属さず魔導師として世界中を旅している

苦手なものは女性で好きな事は一人旅

趣味は観光地巡り

魔導師としての腕も高く大体今のスウェンと同等の強さを持つ

## 第14話 狙われた仲間

第1管理世界ミッドチルダ

「クッ…これ以上、行かせはしない」

「無駄な血を流すという訳ですか」

魔導師がデバイスを構えると、何が起きたのか分からず血を流す倒れる

「無駄な時間はかけられないのです」

ターバンで姿を隠した女性が刀をしまつと、魔導師から何かが出て女性はそれを受け止める

「まあ一応、魔導師と言つ訳ですか」

「レンカー・コア。摘出完了」

「それじゃ私の本当の任務を遂行しましょうか」

女性はその場から消えそのまま後にフェイトとティアナが来る

「これで二人目ですよ」

「やっぱり死ぬ直前にレンカー・コアが摘出されてる。同一犯とみてまず間違いはなさそうだね」

「でも敵の目的はなんなんですかね」

「少なくともスウェンが狙われてい事はわかつた」

デバイスを出しフェイトは通信をする

「聞こえる…なのは?」

だが返つてくるのはノイズだけだった

「なのはが…危ない」

フェイトが向かおうとすると何者かが転移してくる

「君達がスウェンの仲間…なんですか?」

「そただけどあなたは…」

「僕はロイトです。今は訳あつて彼に協力をしているんです」

「そなんだ、私はフェイトこつちはティアナだよ。よろしくね」

フェイトが手を差し出すが、ロイトは後ろへ下がる

「僕は女性が苦手なもので…」

「ごめん知らなかつたから」

「いえ別にこうして話すのは一応、平気なんで」

その後、フロイトとティアナはロイトに話を聞きなのはのもとへと急ぐ

「どうしたのですかそれで終わりですか?」

「彼女、一体何者?」

「抵抗しなければあなたは殺しません。私の目的は…」

女性はヴィヴィオを見る

「その少女をおとなしく渡しなさい」

「ヴィヴィオは渡さないどうしても欲しいのなら力づくで奪い取つてみれば」

「あなたがやるひとしている事は勇氣ではなく無謀です。そんなに死にたいのなら止めを刺してあげましょう!…?」

突然、女性は倒れる

「危ないところだつたな」

「スウェン君なんで急に?」

「安心して旅もできなくなつたし、仲間のピンチはほつとけないからな」

「でもいいの、聖剣士の力も失われてゐるのに無理をして」

なのはとスウェンが話し合つてると女性は立ち上がる

「不意打ちで私を倒せるとでも思つたのですか」

「そんな事は最初から思つてねえよ」

スウェンはデバイスを構え戦闘態勢に入る

「私とやる気ですか?」

「お前を倒して星の民の事を聞き出す」

スウェンが言うと女性はスウェンに近づく

「ならばこうしましょ。私が勝てばあなたは私のもの、あなたが勝てば今まで殺した魔導師の復活+星の民の情報、どうです悪い条件ではないと思いますが」

「いいぜ、俺はその条件で

「ならば決まりですね。行きますよ

「みんなの為にも俺は負けられない

スウェンの体の中で異常が起き始める

「君は色々な世界を回ってたんだよね。何の為に……？」

「僕は昔は星の民について、調べていました」

「星の民？」

聞きなれない単語にフェイトはロイトに聞きなおす

「星の民とはその名の通り星と話す事ができ、星の力を儲つること

ができます」

「それでなんで星の民の事を調べていたの？」

「それは星の民の事が分かれば、父さんが助けられると思ったから

です」

「君が旅をする理由はお父さんを探す為？」

ロイトはデバイスを出し「一人を先に行かせる

「あれは僕が倒さねばならない敵です」

「でも1人より3人のほうが」

「いいえ、彼にはあなた方の攻撃は一切通用しません。そしてきっとあなたの仲間のほうが危険ですしここは僕に任せてもられないで

しょうか」

「わかったよ……でも必ず生きて帰ってきてね。まだあなたの事を完全にわかつた訳じゃないんだから」

フェイトが言うとロイトは頷く

「本当は君とも戦いたくはない、でもやうも言つてられない状況だし、すぐに終わらせるよ刻印解放！！！」

赤色のカーテンがロイトを包みデバイスが変化していく

「行くよイフリートエンペラー」

「炎獄陣」

男を炎で包むが大したダメージは「えられない

「どうしたロイトその程度の炎では俺は焼き殺せはしない」

「クッ…リードなんで君まで」

「俺たちは聖剣士の力を欲している」

「それは彼、スウェンの力の事か?」

リードは頷きロイトにデバイスを向ける

「我がデバイスはコールドメフィス。全てを氷結させ一瞬のうちに  
碎く」

「だが今の僕のデバイスとリードのデバイスじゃ勝負にはならない」「俺も星の力を手に入れてるとしたらどうだ…刻印解放!!」

水色のカーテンが包みデバイスが変化していく

「これが俺の新たな力コールドメフィスサードだ」

リードは物凄い速さでロイトを殴る

「グッ…この程度で負ける訳が…!?!?」

体の半分がすでに凍り付いていた

「サーードの力は一度水を噴射し、相手を濡らした後に凍らせる。だからお前のイフリートなど意味はないのだ」

「クッ…このままじゃ負ける」

「せめてもの情けだ。俺の最強技で殺してやる」

リードの周りに氷の刃ができる

「コールドゼノ!!」

ロイトに向けて一斉に氷の刃が飛びぶが全て叩き斬られる

「何者だ」

「私は烈火の将シグナム。主はやての命令で助けに来た、アギト奴の体についてる氷を溶かしてやれ」

「はいよ」

アギトはロイトについている氷を溶かす

「ありがとうございますシグナムさん、アギトさん」

「礼はいい。ただ、奴の事を教えてくれるか」

「彼はリード元々は僕達の仲間でデバイスはコールドメフィスサード。相手に水を発射した後凍らせるため並の火力じゃ太刀打ちできません」

「そうかなら行くぞアギト」

シグナムとアギトは融合し強さが増える

「今あなたならこいつも使いこなせるかもしれませんね」

「だがお前のデバイスは…」

「今の僕じゃ足手まといになるだけです」

「そうかではありがたく使わせてもらつ」

片方の腕にrevアンティンもう片方の腕にイフリートエンペラーを持ちシグナムはリードと戦闘を繰り返す

「クッ…俺の魔力じゃ奴には歯が立たない」

「行くぞ…アギト」

シグナムが言うとrevアンティンをイフリートエンペラーのくぼみに差し込む

「何だこの異常なまでの魔力は…」

「決めるぞ…」

「獄炎斬…！」

「アイスフィールド」

リードは何とか耐えるが徐々にひびが入つて行く

「こんな場所で俺はやられる訳には行かない…」

リードは全ての魔力を放出し何とか止める

「これで奴も魔力は底をついた筈…!?」

目の前ではまだメラメラと炎が出ていた

「これで最後だ…」

「俺はまだ…星の使命を…」

シグナムが切り抜けるとリードは光となり消える

「やりましたね。シグナムさん、アギトさん」

「だが私のrevアンティンはイフリートに取り込まれてしまつた」

「僕にはまだデバイスがあります。そのイフリートもらつてくれますか？」

「それは嬉しいがこいつの意思是平気なのか？」

シグナムが聞くと口イトはイフリートの中に何かを入れる

「それは刻印と言つてこのデバイスに眠つてゐる真の力を呼び覚ま

す事ができるんです

「そなのか…それでお前はこの後どうするんだ

「あなたについて行きます。僕はまだこの世界の事はわからないの  
で

「それじゃ行くぞ…」

シグナムとアギトの後をロロイトはついて行く

## 第16話暴走する想い

スウェンは本来の力を出せずに苦戦していた

「嘘だろ…クツ…」

「聖剣士の力がなければこの程度ですか」

目の前の女性はスウェンに向けて魔法を放つが何者かに弾かれる

「戦えねえなら下がつてろ」

ヴィータに吹き飛ばされスウェンはなのはのほうへ行く

「スウェン君、平氣?」

「俺は平氣だでも…」

「もう無理して戦わなくていいよ。私は君を失いたくない」

スウェンの鼓動がだんだんと早くなる

「あなたには興味はありません。鉄槌の騎士ヴィータ」

「くそ、なんでだよ。全然手ごたえがない」

「当たり前です。あなたなどでは！？」

突如感じたばかりでかい魔力のほうを見るとスウェンが立っていた

「聖剣士の力もないといつのに何故」

「うおおおおおお」

スウェンは拳に魔力を集中させ思いつきりぶんなぐる

「何だと…」

殴られ吹き飛び立ち上がるうとするが体が言つ事を聞かない

「はあああああ」

再び拳に魔力を集中させ刃を作る

「うおおおおお」

スウェンは斬りかかるが突如現れたゼロに止められる

「セン、リードが負けたここは退くぞ」

「私は彼が欲しい」

「ならば…」

ゼロは急接近しスウェンに一撃を入れる

「これで問題はない筈だ行くぞ」

「それじゃ彼はもうつっていくわね」

ゼロたちが逃げようとすると雷が落ちてくる

「クツ…邪魔立てするか」

「スウェンを置いて行つてくれますかそうすれば手荒な真似はしません」

「センそいつを返せ今やられる訳にはいかない」

「ゼロの力ならやれるでしょ」

センが言つといつの間にかロイトやシググナム達も来ていた

「確かにこれは分が悪いかもね」

「だからこれを使う」

ゼロはスウェンの体内に何かを注入する

「ぐわあああああ

「仲間同士でつぶし合いなさらばだ」

「今度は必ず殺してあげるから楽しみに待つてね」

「待つてくれゼロ、セン」

ロイトは止めるが一人は転移をするそしてなのは達の前には人間の心を失つたスウェンがいた

## 第17話人の心の奇跡

「グオオオオオ」

「ありや、まるで化け物だな…」

「うん。なんか禍々しい気しか感じない」

皆、自身のデバイスを強く握りスウェンを見る

「キシヤアアアア」

「そんな直線的な攻撃で負けるかよ。行くぞ、アイゼン…！」

グラーフアイゼンとスウェンの拳がぶつかり衝撃波が生まれる

「アイゼン！ぶち抜けええええええ」

ヴィータはスウェンを吹き飛ばすがすぐに態勢を立て直し、再びヴィータへと挑む

「アイゼン行けるか！？」

ヴィータがグラーフアイゼンを見るとひびが入り砕け散る

「嘘だろ…なんでだよ」

「ヴィータちゃん、後ろ」

なのはの声で我に返つた、ヴィータはスウェンに吹き飛ばされる

「ヴィータちゃん、平気？」

「高町なのは。あいつを救うなんて考えるな、その甘さを捨てろ。さもねえと次はおめえがやられるぞ…」

ヴィータは氣を失う

「グオオオオオ」

「ごめんねヴィータちゃん、でも私は彼と一緒に生きたいんだ。この世界で…」

なのはは立ち上がりスウェンを見る

「レイジングハートモードリース」

なのはが言うとレイジングハートはもとの宝石に戻る

「なのは無茶だよ。デバイスなしなんて」

「彼は必ず私が受け止める。その全てをね」

「な…グワアアアアアア」

スウェンは苦しみだす

「スウェン君」

なのはがスウェンに近づくと切り裂かれる

「スウェン君：泣いてるの？」

「なのは：俺を殺せ」

なのはがスウェンの頬を伝わる涙をふくと声が響く  
「そんな事聞ける訳ないじゃん。絶対に助ける、約束守つてもらう

ためには」

「だが俺は…もうグウウウ」

スウェンはなのはを離し自分自身を自分で切つて行く

「俺の意識が少しでも残つてゐるうちに…」

「私は必ず彼を助けるもう一度と失いたくはないから…！」

なのはの周りを星が囲む

「やつぱりそうか…彼女は星に選ばれし者だつたんだ」

レイクはなのはに合つているデバイスを放り投げる

「初めまして私はスターフォースあなたに力を与えるべく来ました  
スターフォースに言われたとおりの事をなのははする

「刻印解放！」

スターフォースは姿が変わり丸いくぼみができる

「そこにあなたのレイジングハートを入れてください」

「こう？」

なのはが入れると今度はピンク色のカーテンがなのはを包む

「スターフォースエクセリオン」

「これが私の新しい力…」

「さあ、あなたの想いを彼にぶつけてください

「わかつたよ」

スターフォースエクセリオンを構えなのはは魔法陣を展開する

「スターフォースバスター」

なのはの撃つた魔力砲は真っ直ぐスウェンに当たり、スウェンの中

から何かが出てスウェンは倒れる

「スウェン君！！」

なのははスターフォースを元に戻しスウェンのほうへ行く

「俺は…生きてるのか？」

「当たり前だよ」

「また迷惑かけたようだな…」

「そんなこと全然ないよ。よかつた無事で…」

なのははスウェンへ抱きつく

「本当は君と離れるのが怖かつたんだ。そのまま私の知らない場所へ行つてしまいそうで」

「もう俺はどこにも行かない。皆でそばで俺の大切なものを守るために戦うだから預けていたもの返してくれるか？」

「うん」

なのははポケットからクライスブレイカーを出しスウェンに返す

「この戦いが終わつたらまた暮らせるよね」

「ああ必ずなその時は…」

スウェンは言い止め空を見る

「いやこの戦いに勝つたときに言つたでも今は…」

「ちょっとスウェン君皆見てるよ」

スウェンは力を使い果たしたのかなのはによりかかり眠つてしまつ

「スウェン君起きてよ～」

「なのは…久しぶりなんだし二人で過ごしたらヴィヴィオは預かつておくれから」

「それじゃあたしが運んでやるよ」

ヴィータはスウェンを背負いなのはの家へと急ぐ

「テスタークッサ、ロイトは私が責任を持つて主の元に連れて行く

「それじゃ、はやてによろしくね」

「ああ、また1週間後会おう」

「それまでは一応の休暇つてことでいいのかな」

フェイトが聞くとシグナムは頷きロイトを連れ消える

「それじゃ、ヴィヴィオ行こうか。なのはとスウェンの邪魔した悪いからね」

「スウェンパパとお話をしたかった」

「平気だよ。スウェンとは会える時間を設けるからね」

「うん。ありがとうフェイтомママ」

ヴィヴィオは上機嫌でフェイトと一緒に帰った

## 第18話 一人だけの時間

「それじゃあな」

「うんありがとうね、ヴィータちゃん」

スウェンを受け取りのははヴィータにお礼を言つ

「なんか久しぶりな気がする。スウェン君と一緒にりつて」

なのはは電気を付けあたりを見渡す

「なにも変わつてないよね…」

ホツとしながら一つの写真を見る

「この時から私の想いは変わらずにスウェン君に向いていたんだつたよね」

なのはは写真を戻し「飯を作る

「うーんここは…」

「あつ起きたんだ」

スウェンは今まであつた事を思い出す

「なんで俺はここにいるんだ？」

「フェイトちゃんが久しぶりなんだから2人で過いして言ひよつて

行つたから…もしかして迷惑だつた？」

「いやそうじやないが何と言うかその…」

「もしかして久しぶりに会つたから照れてるの？」

なのはに言われスウェンは顔を赤くする

「それに行つた世界では有名人だつたらしいね」

「なんで知つてるんだ？」

「はやでちゃんからの手紙やユーノ君からの手紙。後はスバルやレ

ツカからの手紙かな？」

「俺、どれだけの仲間に見られてたんだよ…」

スウェンは落ち込む

「スウェン君落ち込むより」飯食べててくれるかな？」

「えつ…なのはが作ったのか？」

「私だつて作れるよ」

「いやそりゃなくて俺の為に作つてくれたのか」

なのはの顔が赤くなる

「いいから食べてみてよ

「ああ、わかつた」

茶碗を持ちスウェンは「飯を食べて行く

「おいしいな」

「ならよかつたそれでさお願ひがあるんだ」

「何だよ…」

「今から一緒に行つて欲しい場所があるんだ」

スウェンは領き「飯を食べて行く

「外で少し待つてくれる?」

「わかつた」

スウェンは外へ出る

「星が綺麗だな…」

「本当だね」

準備のできたなのはが来る

「すいぶんと早いな」

「それより急ごうよ」

なのはに言われスウェンは歩く

「そりだ他の世界回つてどうだつた?」

「どうつて言われても戦争が続いてる世界やただ一人の人間が治める世界など色々な世界があつたな」

「そりなんだ」

「でも俺はミッドルダが一番好きだな」

スウェンが言うとなのはは抱きつく

「それつて私達が好きつてことそれともこの世界が好きつてこと?」

「どっちもかな俺はこの世界で生まれた訳じゃないけど、俺はもうこの世界が故郷だからな」

「私にとつては色々な事があつた世界だし、ユーノ君やフュイトち

やんに会わなければ来れなかつた世界だつたし」

「それもそうか俺もこの世界に来れたのは偶然だしな」

スウェンが言うとなのはは笑顔を見せる

「あつあそこだよ」

「そうかじやあ行くか…」

「うん…！」

二人は手を繋ぎ向かう

## 第19話 敵の正体

「主、ただいま戻りました」「お疲れや～シグナム」「何かすごいぶんと凄いところですね」「君がロイトくんか、私はな～ハ神はやてやよりじゅうな～ロイトは手を握り自己紹介をする

「あつ僕はロイトです。よろしくお願ひします」「何や結構かわええな。それでシグナム、ヴィータはどうしたん？」

「そろそろ帰つてくると思ひますけど…」

シグナムが言つと「コウと話しながらヴィータが来る「はやて～スウェンは今のはと一緒にいるよ」「そうちみんなありがとう～」

はやてはヴィータの頭を撫でる

「それでコウ君、何かわかつたんか？」「それよりスバルとレッカ見なかつたか？」

「いや私の方には来てないで」

「そのスバルさんとレッカさんと言つ人はどんな人ですか。こんな人たちですか」

ロイトは指をさすそこにはスバルとレッカがいた

「二人ともなんでそんなとこにあるん？」

「いやあ～ロイトくんを見たくて来たんですけど、どうしているんですか？」

「あの僕がそのロイトです」

「あれ聞いていたよりかわいいですね」

スバルはロイトを抱ぐ

「あのすいません。離してください」

「照れちゃつてかわいい。そうだキミ私と結婚しない？」

「ちょっとこきなりやな」

「ねえど…」

スバルは聞くがロイトは氣絶していた

「主、テスター・ロッサから預かつてきましたもので

「なんやこれ？」

はやてが読むとスバルからロイトを取り上げる

「こいついう大事なものは最初に渡してへな

「ハッと言いますと？」

「つまりやこの子は女性恐怖症なんや」

そこにいる全員がびっくりする

「実際にいるんですね～」

「実は私もびっくりしてるんや」

「でもおかしいですよね。彼はシグナムさんと一緒に来たんですよ」

「それもそうやな」

はやて達はシグナムを見る

「どうしたのですか。主はやて？」

「なあ～シグナムおかしいとは思わんか

「なにがです？」

「実はこのロイトくんシグナムの事が好きなんやないかと思つてな

再び全員驚く

「えつ…それはないと想いますけど」

「まつ、あり得ねえ事じやねえな」

「そうなんか！…」

「まあ実際シグナムは人気だし結構結婚したいという奴もいるんだ

「ぜ」

ヴィータは何かの本を出す

「何やその本？」

「時空管理局の事が何でもわかる本だ」

ヴィータが読むとみんな感心する

「凄い人気なんやなシグナム」

「ですが私よりテスタロッサのほうが人気だと思いますが」「でも私やなのはちゃんとより人気やん」

はやてが言つとロイトは目を覚ます

「すいません寝てしまつたみたいですね」

「別に気にしてないでそれじゃ君の目的とかから聞いていいつか」

はやてに全てを話しロイトは部屋へ案内され眠りにつく

## 第20話新部隊結成

辺境の地ザンガイウス

「ずいぶんと遅かったな。ゼロ、セン」

「済まないリードがやられた」

「あいつが死のうと計画に支障はありはしない」

「ザンゼス様、復活の準備は整っているのか?」

ゼロが聞くと男は笑う

「後は星を守りし者一人の血だ。それさえあればザンゼス様は目覚める」

「ならいよいよあの世界を滅ぼすのね」

「滅ぼしはしないだがあの世界が戦場になるのは決まりだな」

「ゾイクでは、俺とセンは先に行く」

ゼロとセンはミッドチルダへと向かう

「センが死のうと平氣だが問題はゼロだな」

ゾイクは悩んだ末にある男を呼ぶ

「どうした貴様が我を呼ぶとは」

「ダン、ゼロから目を離すな。不審な行動を取れば殺してかまわない」

「了解だ。ククク…」

ダンもミッドチルダへと向かう

「これで我らが王の復活の時も近い!?」

ゾイクは突然後ろから刺され倒れる

「貴様、何をする」

「いい加減に貴様みたいな下級な奴の下で働くのは疲れたんだよ

「誰のおかげで今の地位が手に入れられたと思つていい!?!」

ゾイクは剣を出し突き刺すが血が出るだけで相手は痛みを感じない

「それが精一杯か?」

「貴様、いつの間にそんな力を」

「さあな、だがお前の出番は終わりだ。じゃあな…」

「ぐおおおおおおおゼクス貴様ああああああ

ゼクスより流れ出た血によりゾイクは消える

「こつちにも時間がないんだ。それにザンゼスあんたにも永遠の眠りについてもらう」

ゼクスはザンゼスの石像を消しミッドナルダへと向かう

「はやてちゃんから指示された場所はここだよね

「地図上だとそう言う事になるな！？」

いきなり床が抜け一人は落ちる

「じめんなう一人とも平氣か？」

「いきなり下に落とされて平氣な奴がいるのか？」

「そうだよ死ぬかと思った」

「それでここはどこなんだ？」

スウェンが聞くとはやては説明する

「元々は何かの研究室みたいやつたんやけど、今は私たちの部隊の為に利用させてもらひってるんや」

「そうなの…」

「確かに機動六課の隊舎より広いもんね」

なのはが話すとセイ、ライ、ヤミが来る

「久しぶりですねマスター」

「本当に久しぶりだな」

「またあなた達と戦うとはなククク」

「みんなも元気だった。それにしても全然変わってないね」

なのはが言つとヴィヴィオ、フュイト、スカルエッティが来る

「なのはママ、スウェンパパ」

「ヴィヴィオ元気にしてた？」

「久しぶりだなヴィヴィオ」

スウェンはヴィヴィオの頭を撫でる

「それでなんであなたがいるんですか？」

「何…私もこの部隊の一員だからだよ

「えつ／＼＼＼＼＼」

なのはは驚く

「でもいろいろと平氣なの、法律とかさ」

「私はこの世界を壊されては困る。だから志願したのだ」

「実際、スカルエッティの頭脳は凄いしな～」

「ふうんそうなんだ…」

なのはは半分、納得した様子でフェイトを見る

「でもなんでフェイトちゃんがスカルエッティと一緒にいるの？」

「私が誰といようとなのはには関係ないよ」

フェイトは顔を赤くして否定する

「何か騒がしいですね～っとスウェンさん久しぶりです！～」

「止める、スバル」

スウェンが止めるがスバルはスウェンに抱きつく

「元気だつたですか。スウェンさん」

「まあ、一応な。それでレッカはどうでした？」

「レッカならあそこにいますよ」

スウェンが指された方を見るとゴーノとレッカが喋っていた  
「それにしてもスウェンさん2年間、世界回つてどうでした？」  
「色々な事がわかつたよ。戦争が続く世界や貧しい世界などね」  
「スバル～そろそろ離れてくれるかな？」

なのははスバルを掴み言つ

「離れますけど最後に一つロイトが話しがあるらしいです」

「そうかありがとうな」

「はいそれじゃまた後で」

スバルは走つて行く

「スカルエッティ頼んでおいたもの作つてあるかな？」

「まあ一応、完成はしているが…本当に使うのか？」

「念には念を入れないとな。だが俺も使いたくはない」

「まあそれは君たちの努力次第だろうな」

スカルエッティに言われスウェンはロイトの元へと向かう

「フロイトちやんとスカルエットイつてそういう関係だったんですね？」

「いやそう言つ訳ではない。彼女が付きまとつているだけだ」

「そうなんですか…」

なのははフロイトを引き離しスウェンの後を追いかける

「さでどうする…」

「一番手つ取り早くここを戦場にしましょうよ」

「待て、そんな事が許されるとどうも思つてこるのか」

ゼクスが現れセンを止める

「それとダンお前は帰つていいぞ」

「なんでだよそれじや…ゾイクの奴に怒られるじゃねえか」

「ゾイクは死んだ、もつ平氣だ。お前は万が一の為に戻れ」

「ちつわかつたよ」

ダンは撤退する

「それでどうやつておびき出すのぞ」

「いづすれば被害者を出さずに奴らをおびき出せる」

ゼクスは自分の血を周りに飛ばし人型に形成していく

「これで騒ぎが起これば奴らは出でてくる」

「あなたにはなかなかの作戦じやない」

「そんな事はどうでもいい、すぐに奴らは出でてくるはずだ。戦闘態勢整えておけ」

ゼロに言われゼクスとセンは戦闘態勢を整える

## 第21話 戦士の迷い

「ロイド、話は何だ?」

「実はゼロを救つて欲しいんです」

「確かに彼は誰かの命令で動いてるかもしれないが、人を殺そうとは考えてないもんな」

「もしかしたらゼロは迷つてはいるかもしません。星の使命に従うかそれとも抗うか」

ロイドが言うとのはとフロイドが来る

「スウェン~~~~」

「ちよつ…フロイドちやん!…」

なのはは止めるがフロイドはスウェンに抱きつぐ

「何か悪いものでも飲んだのか?」

「さあ、僕にもわかりませんけど…」

「ともかくフロイドちゃん。スウェン君から離れてよ

なのはは引っ張るがびくともしない

「別にいいじゃんねえ~~~~」

「!~」

フロイドはスウェンの唇にキスをする

「フロイドちゃん…もう加減はできなによ…」

なのははスター・フォースを準備する

「待て、なのは。こんな場所で撃つな

「デイバインバスター!!!」

案の定スウェンとフロイドは吹き飛ばされる

「あの~警報、鳴つてますけど…」

「えつ…?」

ロイドに言われ耳を済ませると確かになつていた

「いめん、一人の事よりしづ~~~~~」

「えつあのつちよつと…」

ロイトは止めるが猛スピードでダッシュしていく

「僕も呼ばれてるのに…」

ロイトは仕方なくスウェンとフェイトを助けに行く

「それじゃ今の状況を説明する。現在ミッドチルダ内に4人のAランク魔導師を確認している。だがまだ隠れてる危険もあるので、二人一緒に行動してもらう。Aチームはシグナム、フェイトBチームはセイ、ライCチームはヴィータ、なのはDチームはスバル、レッカその他の者は待機だ」

「済まないがテスタロッサが見当たらない」

シグナムが言うとはやてはコウをシグナムに出す

「それじゃコウ君とシグナム頑張つてな〜」

「わかった、それじゃ各自にデバイスに目標地点を入力する。全員無事に帰るよう」

「了解…」

全員領き目標地点へと向かうその頃二人を救出に行つたロイト

「それにしても凄いな…一瞬で壁を壊すなんて、でもやりすぎだとと思うのは間違いかな？」

瓦礫を退かしながらロイトは先へと進んでいく

「ようやく見つけた平氣ですか」

「ロイト…フェイトを止めてくれ」

「えつ…でもどうやつて止めれば…」

フェイトは真・ソニックフォームになりスウェンに抱きついている

「頼む…助けてくれ」

「そう言うわれても僕に女性を引っ張れというのですか？」

「いやそう言う訳じゃないが…なんかだんだんと体の感覚がな…」

フェイトは少しづつフェイトに電気を送っていた

「このままじゃいずれ動けなくなるというかなんか、バインドかれてる気がするけど、気のせいか？」

「さあ…僕にはまだよくわからないので…」

ロイトはスウェンを助けようか迷っていたその頃

「デモンスピア！！」

「コウがジークフリートを刺すと赤い液体となり消える

「これで終わりか。どうだ、シグナム…」

「この辺りにはもう反応はありません」

「そうかなら！？」

「コウは殺氣を感じ回避する

「これを避けるとはあなたなかなか強いわね」

「お前の殺氣はわかりやすかつたしな」

「コウがセンを見るとセンは笑う

「あなたも中々いい男ね私に勝てれば目的を話してあげるわ。でも負ければあなたは私の物どう受ける？」

「そんな事…うつ…」

「コウは突然苦しみだす

「驚いたわ、あなた私達の仲間だつたのね」

「違う断じて…違う！！」

「否定はしてもザンゼス様の呪いは現れてるわよ」

「！――！」

確かに「コウの額に何かの紋章が浮かび上がる

「あなたは私達と同類なのよ」

「止める…俺はグオオオオオオオオ」

「コウ…クッ…」

シグナムはセンに斬りかかるが防がれる

「リードぐらいなら勝てたかもしれないけど私には勝てはしない」

「クッ…力負けしてるのか。この私が」

「あの弱いユニゾンデバイスに助けを求めれば」

「アギトの力無くしても貴様は斬る！！」

シグナムは再度斬りかかるが防がれる

「伝説のデバイスの内の一ツイフリートを持っていてもこの程度と

はね。所詮は闇の書の守護騎士か…」

「何故奴に攻撃が通らないこうしてる間にも、コウは…」

シグナムが口のまづを見ると邪悪なオーラが包みこむ

「止めるおおおおおおおお」

「やうやうね……」

センは口吻に近づき唇にキスをする

「これあなたは私の物ククク……」

「せん……」

シグナムは隙をついて斬りかかるが止められる

「あなたに興味はないの……もう死んで……！」

「クツ……これまでか」

至近距離で魔力弾を食らうシグナムは吹き飛びレヴァンティンは砕け散る

「それじゃあね。私は彼を手に入れられたから帰るわ行くよレヴァン

ン

「了解だセン

口吻ならぬレヴァンはセンについて行く

その後、シグナムはスバルに助けられ帰つてくれる

「そうか。『ウ君は敵になつたんか…』

「主、すいません。私の力が及ばず」

「シグナムが悪いんやない。行かせた、私が悪いんやはやては涙を流し言う

「それではやてさん。こんなものを受け取つたんです」「なんやこれ？」

「何かのデータみたいですけどね

「一応、調べてみるか」

はやてはパソコンに入れデータを見る

「私の名はゼクス。今回は休戦をしたいと思い連絡させてもらつた、明日明朝星降る世界で待つ君達が来てくれるのを楽しみいしている」それでデータは終わつていた

「今の私らには極端に情報が少なすぎる。できれば行きたいんやけどもう星降る世界の道は閉ざされたしな」

はやてが困つているとスバルが言つ

「スウェンさんなら行けるんじやないですか？」

「いや無理やろ。レイジングハートとバルディッシュショット二つ鍵はあるんやけど肝心の聖剣士の力がないからな～」

「それなら一応は応用できるよ」

ユーノが来る

「なのはの新しいデバイススター フォースそれにイフリートそしてクライスブレイカーを使えば一応は開ける

「それ本当か」

「信用して平氣だよ。それに星降る世界に行けばスウェンに聖剣士の力を戻すことも可能かもしないしね」

ユーノが言つとはやてはなのはを呼ぶ

「なのははちやん至急旨を集めてくるんや」

「わかつたよ」

なのはは訳も分からぬまま全員を呼びに行くその頃

「ゼクスを知らないか?」

「知る訳ないでしょ。ゼロ、あなたもう少し危機感を感じなさいよ」

「お前に俺が負けるとでも思つてゐるのか?」

「わからないわよ。」二つちは一人ががりなんだしねえ／＼レヴァン」

ゼンはレヴァンの頬を触り言つ

「仲間同士で殺しあつても意味はない。俺はただ敵を斬るだけだ」

「そうか…中々いい性格の魔導師だな」

「もう出て行つてくれない」

「邪魔したな…」

ゼロはゼクスを探す

「ようやく見つけたぞ、ゼクス」

「何の用だゼロ」

「お前が俺に手紙を出したんだろ?」

「そうだったな」

ゼクスは自分の血でイスを作り座る

「それで話は何だ」

「ゼロ、私と一緒に彼らに協力しないか?」

「確かに俺は義理立てするつもりもない。ザンゼスにな、星の使命を果たすならそっちの方が圧倒的に効率もいいだがどうやって奴らと接触する気だ?」

「我々しか持たない鍵。そして彼らと接触できる場所星降る世界…エンドワールドだ」

「だが奴らに協力するとしてお前は使命を果たす気はあるのか?」

「ゼロ、何故ここまで使命を果たそうとする親友と別れてまで」

「それが今の俺だからだ、使命を果たす為なら誰を殺してもいい例えお前でもな」

ゼロは刀を向け言つ

「だが使命を果たすならそつちの方が効率はよさそつだ。いざとなれば聖剣士もいるしな」

「では決まりだな」

「お前の策に乗つてやる。使命を果たす為に…」

ゼロは出て行くその頃ミッドナルダ機動六課基地

「あつ…なのはさんよかつた」

「ロイト君、スウェン君達は？」

「あそこです…」

「止めてくれ… そろそろ」

声が聞こえた方を見るとフェイトはスウェンに抱きつきながらキスをしていく。その光景を見ていたなのははスター・フォースを構え窪みにレイジングハートを入れる

「一人とも少し頭冷やそうか…！」

「ちょっと待て、俺までか？」

「当たり前だよねえ、スウェン君？」

「あの…少し加減した方が…」

ロイトが言うとなのはにっこりと笑い一人に向けて魔力砲を放つ

「スター・ライト・ブレイカー————」

壁をどんどん貫通し、二人は抵抗もできず吹き飛ばされる

「一人とも反省したかな？」

なのはが様子を見に行くとフェイトは正気に戻つていた

「あれ…なのはそれにスウェン？」

「やつと正気に戻つたんだ。じゃあ吐いてもらおうかな、なんでスウェン君にキスしたの？」

「えつ…スウェンにキス何の事？」

フェイトは身に覚えがないため言つとなのはスター・フォースを再び向ける

「もう少し頭冷やそつかねえ、フェイトちゃん？」

「ちょっと待つて。なのは本当に覚えてない」

「そんな嘘が通用するとでも思つてゐる、もつもつとましんな嘘をつくんだね」

「なのははさんはやさんと呼んでますよつと…危ない」

スバルは言いかけ止める

「あの何がどうなつてゐるんですか？」

「ああ、平氣だよ。別に関わらなければ被害はないから」

「スバル、ちょっとこつち来てくれる？」

「えつ…なんですか？」

スバルは危機感を感じながらなのはの傍へと来る

「スウェン君をフェイトちゃんの傍から離してくれる？」

「了解しました！！」

スバルは素早くスウェンを救出す

「それじや準備はいいね。フェイトちゃん？」

「なのは本当に覚えがないんだけど…」

「やつぱり一段階にしよう」

なのはは笑いディバインバスターを放つた後スター・ライト・ブレイカ―を放ちフェイトを吹き飛ばす

「何かすつきりしないなつついでだからスウェン君、スバル。頭冷やそうか！！」

「なんでそうなるんですか～～～」

「諦めろ、あなたのなのは止められない」

「そんな殺生な～～～」

「人も飛ばされようやくなのははもとのなのはに戻る

「さあ行こう」

「はつ…はい…！」

ロイドは悲惨な状況を見ながらその場を後にする

## 第23話全てを失い取り戻す力

あれから1日後

「私はゼクス・ロード、今日からこの部隊に配属になる。よろしく頼む」

「俺はゼロ・クラン、馴れ合いをする気はない。ただ自分の使命を果たす為だ」

二人は自己紹介を終えると、ゼロは出て行く

「あれゼロ君はどないしたん?」

「彼なら平氣だ。何か困りものかい?」

「コウ君がどうしてるのかなと思つてな」

「コウとはセンが連れてきた青年の事か」

ゼクスが言つとフェイト、スウェン、なのはが来る

「そう言えば聞きたいんだがなんであんたは俺たちの仲間になつたんだ?」

「私の居場所はあそこにはないそれに君達に興味があるからだ」

「なるほどだが裏切り者なんだろ。向こうにどつては?」

「そうなるだろうな、だが私はもとから彼らとは仲間や友達とは思つていない」

ゼクスが言つとゼクスはスウェンを見る

「なるほど君が聖剣士か」

「なぜわかる?」

「私は過去に一度戦つた事があるからな。だが完全には目覚めていないようだな」

「あんたわかるか聖剣士を目覚めさせる方法」

ゼクスは下を向く

「ない事もないが大切なものと引き換えだぞ」

「大切なものと引き換え…」

「記憶を全て失うんだ」

「……」

スウェンならぬ全員が驚く

「それって……私達の事を忘れるってこと?」

「そう言う事になるな」

「だが他人との絆など所詮は邪魔になるだけだ」

ゼロが降りてくる

「俺は自分の使命の為に必要のない絆など消した  
「そんなことないよ。思い出は大切なものだつて  
「普通に暮らすなら必要かもな、だが俺たちがやつてているのは戦い  
だ。戦いに私情など邪魔なだけなんだよ」

「でも思いが力になるんでしょ。クライスソウルは」

「だつたら思い出は必要なんじゃないかな?」

二人は言うがゼクスは何も言わない

「さあ、どうする君が選ぶんだ」

「俺は……誰かを傷つける力じゃなく、大切なものを守る力が欲しい。  
記憶を無くしてもいい、俺は誰もが幸せで暮らせる世界を作れる力  
が欲しい!!」

「やはりか……」

ゼクスは帽子で顔を隠す

「それが君の信じる事か?」

「そうだな……」

「ふつ……やはり私のかけは正しかったようだな  
「早く渡してやれよ」

ゼロに言われゼクスはある宝石をスウェンに託す

「君の決意、確かに見せてもらつた。これはある女性から君に渡す  
ように言われていたものだ」

「もしかして俺を試したんですか?」

「過ぎた事を悔やむな、この宝石の力を完全に引き出せば君の中に  
眠る真の力もおのずと蘇る」

「後は修行あるのみか……」

スウェンが言うとゼロは刀を向ける

「聖剣士の力呼び戻すなら一番手つ取り早いのは実戦だよな」

「ちょっと待つていきなりか？」

「戦争にルールなんてありはしないやるかやられるかそのどちらかだ」

「ついでに言つておく彼は闘争本能の塊だ氣を付けるように……」

ゼクスは笑いながら忠告する

「さあ始めるか……」

「ここで始める氣かよ……」

「戦争にルールなどありはしない……」

ゼロはスウェンの言葉を聞かずに斬りかかるがヴィータに止められる

「これ以上この基地壊すんじゃねえよ……」

「何だこいつ……」

「直す身にもなつてみる。この基地大変なんだぞ……」

ヴィータはゼロを掴みはやての元へと連行するその光景を見て皆は笑っていた

## 第24話 未来の彼女との約束

ゼクスとスウェンは模擬戦をしていた

「うわああああ

赤いどろどろの化け物がスウェンへと襲いかかる

「何か凄いな」ゼクスさんの技

「血を操るなんてなんか凄いよね」

「その程度か?」

「誰が?」

スウェンは赤いどろどろの化け物を飛び越え越しに魔法で撃つ

「どうだ…」

「まだ甘いぞ、最後まで油断はするんじゃない!…」

「何だよそれ…」

ゼクスの腕に先ほど倒した血の化け物が付き剣へと変わる

「踏み込みが甘いぞ」

「クッ…強い…」

スウェンは何とか押し返そうと頭の中で作戦を練るが「ことく看破される

「駄目だ、勝てる気がしない…」

「どうしたこの程度か、ならば止めと行くぞ」

「何だ俺の周りに血が集まってる…」

「終わりか…」

ゼロが言つた次の瞬間、血がスウェンを包む飛び散る。そしてそこにはスウェンの姿はなかつた

「そんな…なんで殺す必要があるの?」

「私は殺してはいない。ただ彼に、きっかけを『えただけだ』

「返してよ、スウェン君を…」

「後は彼自身の問題だ。私が出る幕ではない」

ゼクスは部屋を出て行く

「ハアハア…なんだここ息が詰まる…」

スウェンはただ少しだけ差し込む光を頬りに、歩き続けるとなれば  
がいた

「なのは…」

「お帰りスウェン君、ご飯できるよ。それとも先にお風呂に入る  
？」

「なんていきなり家の中に…」

スウェンが周りを見るとみられたものが結構あった

「それでどうするの？」

「それじゃまず」飯から食べるよ

「はいどうぞ」

なのはに渡されスウェンはご飯を食べて行く

「スウェン君、今日はどうだつた？」

「何がだ？」

スウェンが聞くとなのはは涙を流しながらスウェンへと抱きつくる

「私は君をもう一度と失いたくない」

「だが…俺は…」

スウェンの脳裏を眞で過ごした日々がよぎる

「行かなくちや…眞が待つてゐる」

「どうしてそこまで自ら危険の中に入つて行くの？」

「それが僕にできる最低限の事だし何より失いたくないから

「その決意は変わらないの？」

スウェンは頷く

「なら私も君を信じる聖剣士の能力を今一度彼に…」

「なのは…」

「君の信じる未来には、私もいるよね

「必ずいるよ…」

スウェンが言うとなのははキスをする

「それじゃ待つてゐる。君の望んだ未来で、だから必ず戻ってきてね

「うん、約束するよ。僕は必ずみんなで過ごす、未来を手に入れる

「大好きだよ…」

なのはに言われスウェンは顔を赤くしながら皆の待つ現実世界へと戻る

「そろそろか…」

ゼクスが戻つてくると結晶と化した場所からスウェンが出てくる

「スウェン君…」

「ちょっと…なのは

スウェンは突然の事に驚くが何とか支える

「生きててくれたんだね」

「未来の私つて？」

「未来の君と約束したんだ。必ず平和な世界を手に入れると…」

「未来の私つて？」

なのはが聞くとゼクスはスウェンの前に来る

「ならば彼女に会えたんだな」

「なんとかねそれに聖剣士の力も戻つたし」

「これで準備は整つたか…後は…」

ゼクスは空を見る空は赤く光時々雷が起きる

「彼らを休ませなくては…さつそくで悪いが力を貸してもらつぞ」

「わかりました…」

「いよいよあいつらとも決別か、ゼクス

「我々の目的の障害となるものは、全て排除させてもらつ…」

ゼクスは何かの塊を空に向け投げると3人の黒い影が現れる

## 第25話集結するメンバー

「あれって…私にフォイトちゅんそれにはやてちゅん？」

「なるほど、彼女達を「ロビー」して来たか」

「だがなんだろうと邪魔をするなら切り捨てるのみだい？」

「その通りだな。行くぞ…」

ゼクスは挑むが、はやてらしき影に止められる

「だらしがないぞ、ゼクス！？」

ゼロが動くよりもフォイトらしき影ははやく動きのど元に向やう雷

を帶びた小刀を向ける

「一步でも動けば、あなたは死ぬ」

「クッ…なんだこいつ殺氣は感じないのに、凄い威圧感だ」

ゼロもゼクスも一步も動けずいた

「どうすれば…」

スウェンが迷つてると田の前になのはらしき影が来る

「戦いはただ人の悲しみや怒り、負の感情を増大させるだけだよ

「でも僕は…」

スウェンが下を向くとなのはらしき影はスウェンを掴み笑う

「ようやく捕まえた。もう逃がさないよ」

「駄目だ、力が出せない」

スウェンは振りほどこうとするが無理に振りほどこうとすれば腕がちぎれる危険があった

「この程度か…」

「あれはコウ君…」

「はやてちゃん危険だよ…！」

なのはは止めるがはやはレヴァンへと向かう

「わかるか、コウ君。私や、はやてや」

「俺の名はレヴァンだ。コウは死んだ、貴様も死ね」

「…」

はやては驚くがレヴァンの撃つた魔力砲ははやてに届かず田の前に見覚えのある羽が現れる

「い」無事ですか。主、はやて

「はやてちゃん、平氣ですか」

「リインにまさか…リインフォースか？」

「そうです。でも私達だけではありません、ここに来たのは

その後、向こうで悲鳴が聞こえる

「平氣ですか。兄さん」

「エリオ…今までどこに？」

「今は僕の事より、ダークノを止めないと」

エリオはストラーダを持ち出す

「それに僕だけではありません。ティアナさんやキャロそれにギンガさん、ヴァイスさんも来てます」

「そうなんだ…」

「兄さんなんかオーラは弱くなつたけど、潜在能力は上がつたようです」

「そんなこともわかるの？」

エリオは頷きストラーダを強く持つ

「兄さん行きますよ。あの程度でくたばる筈がありませんからね」

「それじゃ…行くか」

スウェンの田の色が赤色に変わり手にはクライスソウルが握られる

「ずいぶんと遅い到着だな…ティアナ」

「これでも飛ばしてきましたよ。それに絶体絶命のピンチだったじゃないですか」

「うつ…少し油断しただけだ」

「あれ~いつも油断するなつて言つていたのは誰でしたっけ~

ティアナが言うとダークFはがれきの下から現れる

「少し油断したけどまだやれる!~」

ダークFは突然飛んできた魔力弾を避け田の前に迫る拳を避けるが

背中に痛みを感じる

「そんな…こんな場所で終わりだなんて…」

「すいません、フュイトさんでも眠つてください」

ダークHは光になり消える

「クツ…」のままでは私の敗北か

「こんなもんか？」

「だが私に敗北はない…！」

ゼクスは再び斬りかかるが止められるといふか弾かれ建物へと激突する

「クツまだだ、まだ私は…！？」

ゼクスが瓦礫から出ると目の前に灰色の魔力砲が迫つてくる

「ここまでか…」

「クククさらばだ、裏切り者…！」

ダークHは笑いゼクスを見るがゼクスの前に何かがいたのに気づく  
「守護の務め今度こそ果たす…！」

「さすがね、ザフィーラ」

シャマルとザフィーラが現れる

「何故、私を…」

「はやてちゃんが認めたなら私達の仲間だもの、命がけで守るのは  
当たり前の事」

「それが盾の守護獣としての務めだ」

「私を裏切るか…？」

ダークHは危険を察知し後ろへと下がるとヴィータがアイゼンで殴  
りかかる

「ちつ…外したか」

「そのようなものにやられる私ではない…うぐつ…！」

「隙だらけだったのでな、斬らせてもらつた」

「貴様あああああ」

ダークHはシグナムのまつを見るとヴィータにおもいつきり殴られる

「はやての恰好でこれ以上悪さすんじゃねえよ…！」

「グオオオオオオ血が…まさか貴様…」

「最期ぐらいは丁重に送つてやる……」

「止めるおおおおおお」

ゼクスの技によりダークHはあとたもなく飛び散る

「済まない私一人では負けていた」

「まあ悪い気はしないけどな、でもその怪我そんなに強かったのか  
？」

「そう言つ訳ではない私が自分の力を使つては自分の血を流さなければならぬ」

「つまりそれは自分で傷つけた物そう言つ事だな」

ヴィータに言われゼクスは頷く

「さてそれじゃあたし達ははやてを助けに行くか

「そうだな、スウェンのほうは平氣だろ」

「急ごうリインフォースだけでは押されてる筈だ

「それならば私も行こう

5人ははやての元へと向かう

## 第26話全ての黒幕

「うおおおおおお」

「はあああああ」

エリオとスウェンはダークNへ反撃の暇も与えずどんどん斬撃を加えて行くがダークNは血を流しながらも隙を探す

「見つけました！！」

ダークNが手を伸ばすとスウェンを掴む

「兄さん！！」

「クッ…なんだこれ離せない？」

「もう離さないよ。これだけ傷つけられたんだもの」

「兄さんを離せえええええ！」

エリオは斬りかかるがダークNはスウェンを盾にする

「なんて卑怯な…なのはさんなら…きつとやらないと悪い…」

「エリオだんだんと声が小さくなつてゐるぞ…」

「さてどうする。私を斬れば彼に当たる私は別にいいけどね～男の人に斬られるのつて何か興奮するのよね～～～」

「兄さん彼女は変態なんですか？」

スウェンは頷く

「君もよく見るとかわいいね～私の恋人になつてみない？」

「いい加減にしろ、センその首切り落とすぞーー！」

後ろにいきなりゼロが現れる

「何をしに来たの？裏切り者」

「そろそろお前の存在は目障りだ。消えてくれるか？」

「私を斬る前に後ろに注意した方がいいよ

「なに！？」

ゼロは後ろに殺意を感じ動けない

「私を殺したとでも思いましたか？」

「我らは何でも蘇るコアが存在する限りな

「ずいぶんと面倒くさいものを用意したんだなセン」

「それが彼からの命令でしたしね」

「セントが言つと魔力砲が飛んでくる

「クッ…油断した」

右腕を押さえセンが魔力砲の飛んできた方向を見るとなのはにフヒ  
イト、スバル、ロイトがいた

「もう止めてくれない、リル」

「私はもうあなたの知る私ではないの、だから気安く呼ばないで…！」

「この香りは僕の知つてゐるリルだよ」

「…………！」

ロイトはセンにキスをする

「貴様ああああああ

「グッ…」

ロイトは右肩を押さえながらセンを見る

「なにが君を変えたの？」

「あなたには関係ない。ましてや裏切り者なんかに…！」

「確かに僕は君たちを裏切つた、でもそのおかげで君の大切さがわ  
かつたんだリル…」

「その名で呼ぶなああああああああああ

センは攻撃を仕掛けるが当たらない

「何故だ、何故、涙が止まらない私は…」つおおおおお

無理に自我を引つ込めようとする

「リルもういいんだ僕は…」

「私に触れるなあああああ

センはロイトを吹き飛ばす

「ハアハア…これ以上寄るな…！」

センは頭を押さえ言う

「後一步だよ頑張つて…ロイトくん…！」

「僕は…君に何をしてあげられるか分からぬでもこの気持ちだけ

は本当なんだ僕はリルと一緒に生きたい！！！」

「！！！」

センは魂が抜けたように倒れる

「リル！！」

ロイトが支えるとセンは目を開ける

「ありがとうねロイト」

「リル…僕の事がわかるの？」

「当たり前だよ。私が世界中のだれよりも大好きな人だもの」

「リル…よかつた」

ロイトがなくとも涙を流す

「感動の再会だね」

「うん、彼は彼女を助けるために今まで戦い続けたんだね」

「ついでに言っておく俺やリードそれにゼクスもあいつの仲間だ」

「それじゃ彼はただ一人で仲間と戦つてたの？」

ゼロは頷く

「でもよかつたですねえ～～～～」

「スバル、あんた涙を流すか、鼻水出すかどっちかにしなさい」

「これでいいのかな？」

「恋人同士ならいいんじやないかな」

「なのははスウェンによりかかり言う

「なるほどこれが俺が忘れていた力か…」

「大切な人を守る時には人は無限の力を出せるんだよ」

「想い…俺の心の中にもあるのか…この感じなんで奴が」

「何だこの禍々しい感じ二人が危ない！！！」

スウェンとゼロはロイトとリルの元へと向かう

「逃げろ二人とも！！！」

「えつ…？」

「いいからそこから動くな」

スウェンは転移魔法を発動し二人を転移させると何者かが降りてくる

「クッ…なんて気迫だ」

「まさかこれほどとはな…ゼノン…！」

ゼロが言つと腕が出てきて二人を捕まる

「スウェン君…！」

「クッ…駄目だ振りほどけない」

二人は脱出しようとするが振りほどけずだんだんと強く握られる

「ぐわああああああああ

「ぐうううううううううう

「中々しぶとい奴らだなならばこれでどうだ…？」

突如何かが現れ腕を切断する

「ハアハア…ようやく見つけたぞゼノン…！」

「ゼクスに…レヴァンか

「いや俺はコウだお前の呪縛はすでに解けたんだ」

「想いの力か…ならば面白い貴様らにとつておきのプレゼントをくれてやる…！」

全員の足元に転移魔法が発動しその場から全員消える

## 第27話 地球…？

「ミッドチルダから遙か離れた世界、そこに一人の魔導師が落ちていへ  
「うわああああああ～～～～」  
「なになに？」の声、上から…「  
女性が上を見るとスウェンが落ちてきた  
「すいません…」  
「ふにゃあ～～～～」  
女性は皿を回し倒れている  
「どうしよう…」  
スウェンが色々と見ていると女性は起きる  
「あれ～なんで私こんなところで寝てたんだろう？」  
女性は記憶を整理しスウェンを見る  
「あ～～～思い出した。君がいきなり落ちてきたりになつたんだつ  
た」  
「その節は…すいません」  
「いや別に怪我もしてないし問題ないよ。それより君の名前は？」  
「あつ僕は高町スウェンです」  
スウェンが言うと女性は驚く  
「へえ～～～君も高町つて言つんだ、私はなのはよろしくね」  
「よろしくお願ひします…」  
スウェンが言うとなのははスウェンの頭を撫でる  
「そうだ私の友達紹介してあげるよ。ついてきて」  
なのはに言われスウェンはついて行く  
「「めんみんな～～～遅れた～～」  
「まあいつもの事だから怒りはしないけど…その子誰？」  
「えつと空から現れたスウェン君だよ～～」  
「えつとよろしくお願ひします」  
スウェンがお辞儀をすると皆近づいてくる

「私はアリサ・バーニングスコットちは月村すずかそんでもつてこいつ  
はハ神はやてそれで彼女はアリシア・テスター・サヨリしきくね  
「はい…お願ひします」

スウェンが挨拶を終えるとはやでが近づいてくる

「なあ～君つて魔法使いなんか？」

「いやそうじやないよ、ただ空から落とされただけだし  
「魔法使いならサインでも貰つといつと思つたのにな」

はやてはスウェンの前から去る

「ふう～何かこの世界じや僕が魔導師という事は秘密にしておいた  
方がよさそうだ…」

「どうしたのスウェン君？」

「いや何でもないよ、それより君はどんな仕事をしてるの？」

「最近は不況だしね、本来のお店よりバイトとかのほうが多いかな  
？」

なのはが言つとあるお店の前へと来る

「ここは…？」

「今はもういらないけど私の大切な人が私と一緒に始めたお店だよ  
「へえ～～～！」

スウェンはあたりを見ながら一枚の写真を見ると笑顔で楽しそうに  
少女と少年がほほ笑んでいる

「その写真は彼と初めて会つた時に撮つた写真だよ…」

「その彼、名前は僕と同じだよね」

「うんそうだよ、そして私達は結婚したんだ子供も今は2人いる  
人はヴィヴィオで一人はユーノだよ」

「なんだ…」

スウェンは埃がかぶつている台所を拭き料理を作り始める

「なにやつてるの？」

「なのはに元氣を出してもらおうと思つてね」

「あ…」

なのははスウェンを見ると驚く

「スウェン君…私に会いに来てくれたんだね」

「わ…危ないよ…なのは…」

「てへへへごめん」

「さあ出来たよ、どうぞ…」

スウェンは自分が作ったご飯をなのはに食べさせる

「うん、おいしい～～」

「そうかよかつた…」

スウェンは後片付けを終えなのはを見る

「ねえ、君は何しにここへ来たの？」

「なんでだろう。ただ飛ばされてただけなんだ」

「そうなんだ…」

「でも何かホッとしたよ。僕の知っている人に会えて…」

スウェンが言うとなのはは抱きつく

「どうしたの…なのは？」

「君は君の大切な人を悲しませないでね」

「平気だよそれに…」

スウェンは玄関を見るその後になのはも玄関を見ると死んだはずの

スウェンがいた

「なんで…スウェン君が…」

「悪かつたな、待たせて…」

なのはは涙を流しながらスウェンへと向かっていく

「もう…どこにも行かないよね」

「ああ、だからここに来たんだ」

スウェンはスウェンの前へと立つ

「君が別次元の俺か…」

「何か強そうですね…」

「人間の能力に違いないさ、それより君はまだ戦い続けているんだろ」

「そうですね…」

スウェンが言うとスウェンは何かを託す

「なんですかこれ？」

「俺がなのはと出会つきつかけだ」

「そうだよ。でももう私達には必要ないものなんだ」

「まだ君には必要な物の筈だ。遠慮しないで受け取つてくれ」

二人は笑顔でスウェンへと渡す

「でも僕には…」

「君が本当に誰かを守りたいと思えば必ずこの力は必要になる筈だ」  
「君にはまだやらなければならない事がある筈。だったら君が持つ  
のが一番いいんだよ」

「ありがとうございます」

スウェンが受け取ると次元の壁が開く

「後は君の行きたい場所へそれが導いてくれるや」

「うん胸張つて行きなよ頑張つてね」

「はい、色々とありがとうございます」

「どんな時にもあきらめない心それが一番大切な想いだよ…」  
なのはが言つとスウェンは入つて行く

## 第28話裏切り…そして…

次元の壁を出るとそこには何者がが結晶化されていた

「なのはにフェイトそれから…」

他にもゼロやスバル、エリオなど新部隊のメンバーが結晶の中にいた

「ハアハア…皆を返せ…！」

「弱者は所詮吠えるしか脳はないらしいな」

血を流しながらロイトは言つがゼノンは体内から何かを出しロイトを包み込む

「クックククク残念だつたな、貴様も我が奴隸となる為にその命全て我が包んでやる！」

「クッ…僕の力じやここまでか…」

ロイトは包まれ結晶化する

「済まぬ。私の為にだが必ず、私はあいつを倒す…！」

ゼクスは全身から血を出しナイフを作りだす

「行くぞ…はあああああ」

ナイフは全て一斉にゼノンへと向かうが途中で叩き落される

「そんなものか？ゼクス」

「何故、お前が生きている…ザンゼス！？」

突然痛みが来てゼクスは何とか意識を保つ

「クッ…ゼノンお前さえ消せばまだ私達にも勝ち目がある筈だ」

「無駄な努力というものだ。いいから消えろ…！」

「クッ…まだ私は…」

「悪あがきか…所詮、弱者の考へことなど全て同じ。いいからその命我に捧げる…！」

ゼクスは苦しみながら結晶化してしまつ

「そこに隠れている奴、出てこい…！」

スウェンが出て行くとゼノンは笑つ

「貴様が聖剣士か？」

「…………」

スウェンは黙りこむ

「ならば我にその命捧げてくれるか?」

「僕は……」

スウェンの周りを何かが包みこんでいく

「まことに……貴様はここで息の根を止めてやる!…」

ザンゼスはスウェンへと斬りかかるが何が起きたのかもわからず腕が吹き飛ぶ

「クツ……何だあの障壁……」

「…………」

ゼノンは何もしゃべらずただスウェンを見ている

「ゼノンどうすればいい?」

「我に良い作戦がある。一度、戻つてこい」

ザンゼスが戻ると一人の女性が結晶から出でてくる

「お呼びですか…」

「さつそくで悪いがあの者を止めてくれるか?」

「わかりました。あなたの期待に答えられるよう全力をつくします」

「悪いな…」

ゼノンが言うと女性はスウェンへと向かつ

「本当に平氣なのか?」

「多分戻されるだろうな、だが怪我は負う筈だ。その後で、ビルにでもできる彼も彼女もな…」

「なるほど随分と悪くなつたものだな」

「お互い様だろ?」

二人が話してるとスウェンを包んでいたオーラがスウェンの中へと入り目の色が変わつて行く

「行くよ…クリストライデント」

スウェンは向かつてくるのはへと挑む

「あなたには恨みはないけど…あの人からのお願いだから…」

「僕が必ず戻すだから…少しだけ我慢して…」

スウェンはなのはを抱きしめ言つ

「スウェン君…でも私は…」

「君がどうなるうと僕は必ず守る。それが僕の信じる心だ…」  
「スウェンが言つと口を包む結晶もだんだんと溶けて行く

「何だと…どう言つ事だ」

「ゼノン、貴様の負けだな…」

「なつ…ザンゼス貴様、裏切る気が…」

「裏切りか…成程、貴様らしい例えだな」

「ザンゼスはゼノンを刺し吸収していく

「ククク俺の完全復活の時だ…聖剣士今だけは生かしてやる。だが

貴様らに残された希望は消させてもらう…！」

「まさか…止める罪のない人々を殺す気なのか

「弱者は消えるそれがこの世界の掟だ。デス・メテオ・インフェルノ…！」

「止めるおおおおお」

スウェンは止めようとするが炎はミッドチルダを包み込む

「フフフハハハハこれが弱者の末路だ」

「うわああああああ

「その悲しみは俺の力へと変わるクククもうすぐだもうすぐで俺は完全な力を手に入れる」

「貴様あああああ

スウェンはなのはを置きザンゼスへと向かう

「ふん今貴様に構つている暇はない…！」

ザンゼスはスウェンを受け止め地上に落とす

「返せ…皆の笑顔を…返せ…！」

「言つた筈だ貴様に構つている時間などないと…」

スウェンは殴られ飛ばされる

「聖剣士、星の使い、聖なる8人の戦士」

「何の事だ…」

「俺は待つている君達が俺を倒す事をな…」

ザンゼスは消えミッドチルダの炎も消える

「彼は… 一体… 何の為に生きているんだ?」

スウェンは悩みながらのはのほりへと向かう

## 第29話最後のわがまま

その後、スウェン達は海鳴市へと避難していた  
「なのは…」  
「どうしたのスウェン君?」  
「僕のせいだ…ミッドチルダは…」  
「平氣だよ、ミッドチルダは何なら見に行こつか?」  
なのはに聞かれスウェンは頷く  
「じゃ…目を閉じて」  
「うん…」  
スウェンが目を閉じなのはに連れてかれると確かにミッドチルダだ  
つた  
「でもなんで…ザンゼスの攻撃を受けたの?」  
「あれはもう今は使われていない世界だよ。だから実質ミッドチル  
ダへの被害はなしなんだよ」  
「そうなんだ…」  
スウェンがあたりを見るとなのははスウェンの腕を持つ  
「絶対に帰つてくるよね…」  
「えつ…何の事?」  
「とぼけても無駄だよ。一人で決着をつけに行く気でしょ」  
「なのはにはお見通しか…」  
スウェンは空を見上げ言つ  
「それに私だけじゃない、みんなもわかってるよ」  
「えつ…!?」  
スウェンが後ろを振り向くと皆がいた  
「スウェン…これを…」  
ユーノはスウェンに向けて何かを投げる  
「これは…?」  
「君が死にそうな時に使ってみて、きっと力になる筈だから

「そしてこれは僕からです」「

ロイトに渡された宝石は紫の宝石だった

「絶対に帰つてきてくれさい…」

「僕は死にに行くんじゃない。彼を…ザンゼスを止めるために向かうんだ…！」

「ミックドチルダは必ず守る。だから気をつけてね」

「うん、それじゃ…行つてくる…！」

スウェンの前に次元の扉が開きスウェンは吸い込まれるように入つて行く

「でもなのは、本当にいいの？」

「うん、私は信じてるから彼の事…」

「大丈夫ですよ。スウェンさんなら必ず帰つてきます、だから私達はスウェンさんが帰つてくる場所を守り通さなきやいけません…！」

スバルが言つとなのは達は次元震を感じる

「ついに始まつたのか？」

「なのは…こつちにも敵が来てる、行くよ…！」

「必ず守つて見せる。彼が帰つてくる場所を…！」

なのは達は突如現れた謎の敵へと挑む

## 第30話最終決戦 前編

「みんな…僕は必ず帰る。だからそれまで……？」

スウェンは突如、来た攻撃を避ける

「何だ…聞いてた話と違つじやねえか」

「そこをどいてください…」

「小僧がいきがるんじゃねえええ」

「ごめん…」

スウェンが謝ると同時に斬り裂かれる

「馬鹿な…俺はグオオオオオ」

「僕もまだ負けられないんだ」

スウェンは先を急ぐ。その頃ミッドチルダ

「クッ…敵の数が多くすぎる」

「だが私達は死守しなければならない」

「俺もこの世界を壊されたくはないしな」

「みんなが同じ気持ちなら行ける筈だよ」

「俺達は何もしなくていいのですか？」

「私の予言が正しければ聖剣士に力を送る為にあなた達は必要となる筈ですそれに…」

「…」

カリムが見ると男は飛び立つ

「彼は…」

「あの戦いの後聖剣士が連れてきた騎士ゼスト・グランガイツです」

「なるほど…彼が背負つてきたのは彼だつたという訳ですね」

「ザンさんですか？」

シャツハが聞くとカリムはザンへ言つ

「あなたの力ならもう一つのこの世界と並行して存在する世界へ行ける筈です」

「それは可能ですが… 次元震が多発しますよ」

「いまさら多くなうと大した問題ではありません。それにこの世界の命運は彼の力に託されているのです」

「ならば私に反論の余地はありませんね。すぐに準備をしますが、少し時間がかかります」

ザンは準備の為に部屋を出て行く

「シャツハ、あなたはこの人をここに連れて来てくれますか?」

「わかりました、それでは…」

シャツハも向かう

「聖剣士それと対をなすものが彼女の筈ならすれば…うつ…?」

カリムは血を吐く

「急いでください…聖剣士の命の灯が消えかけています」

カリムが念話ではやて達に言つと空に映像が写る

「遅かつたですか…」

「貴様らの希望は今、潰えた。それがその証拠だ」

「なんてひどい事を…」

「スウェン君…!」

なのはは達はザンゼスを睨む

「ククク所詮、聖剣士といえど一人じゃ何の意味もない!…?」

ザンゼスの背中に痛みが走る

「僕はまだ死んでない…まだ全てが終わつた訳じゃない」

スウェンの姿は、目は片目なく、心臓部分に穴が開き、左腕は肩から下がなくデバイスはもう所々にひびが入つた状態だった

「約束したんだ。必ず帰るつて…」

「黙れえええええ…!」

「グッ…」

スウェンは抵抗もできずに吹き飛ばされる

「貴様は皆が見ている前でハつ裂きにしてやる!…?」

ザンゼスが近づくとスウェンの傷が全て治癒されていくといつも人間ではなく悪魔に近づいて行く

「うおおおおおおおお」

「グウウウウ、貴様、」とさにやられる我ではない」

スウェンを受け止めザンゼスは腹から腕を出しスウェンの左目を切り裂く

「はあああああああ

「何だ力が上昇している?」

ザンゼスは驚きながら吹き飛ばされる

「いけません。その力に翻弄されでは…」

「何だ…この声…」

スウェンの意識の中にカリムの声が響く

「一体何が…」

「私はカリム覚えてますよね」

「カリム…」

「いえ今はそんな事は関係ありません。」のままではあなたは心を失くしただの戦闘兵器となります」

カリムの言葉にスウェンは驚く

「このままではあなたは自分自身の手で大切なものを壊します」

「僕は…まだ死に訳には…行かない…！」

スウェンから再び光が出て姿が変わる

「ついて来てくれますか」

「あれ、シャツハ何しに来たの?」

「私は今回ある人のお願いで高町なのはあなたを迎えてきました」

「どう言う事?」

なのはが聞くとシャツハは一応自分のわかる範囲の事を語つ

「わかったよ。私はついて行くでも私が抜けたら…」

「その点はご心配なく、我々の仲間がいますから」

「俺はゼスト。よろしく頼む」

「こちらこそお願いします」

ゼストは元々なのはがいたポジションへと着く

「これで心配はありません行きますよ」

なのははシャツハに連れられカリムの元へと連れて行かれる

「…」

「私達の世界です。手荒な事をして申し訳ありません」  
ザンは謝る

「この世界の危険なんだろ。なら俺たちは協力するさ」「うん、誰もが幸せに暮らせる世界を実現させるためにね」「すいません、本来はあなた達の力を借りるなど駄目なのですが…」「困った時はお互い様さ。それに…」

男性は空を見て言つ

「こんな綺麗な世界、壊させたくない…」

「私も彼と同じ気持ちです」

「それでは私について来てくれますか?」

二人は頷きザンの後をついて行く

「失礼します…」

「シャツハ、彼女は連れてきましたか?」

「はい、こちらに…」

シャツハはなのはをカリムのほうへ連れて行く

「久しぶりですね…」

「あつ…カリムさん?」

なのはが聞くとカリムは笑いながら手を差し出す

「あなたに会わせたい人がいます」

「会わせたい人?」

なのはが再び聞くとドアが開き一人の女性と一人の男性が入つてくる

「えつと…どちら様ですか?」

「俺は高町スウェン、よろしくな」

「私は高町なのは、よろしく…」

二人が自己紹介をするとなのはは驚く

「えつ…高町なのは…? 同姓同名ですか」

「いや違うよ。君達とは別世界のあなたと言えばわかるかな？」

「つまり、俺たちは本来こちらの世界に干渉してはならないんだ」

スウェンが言うとなのはは頷く

「それでも来たという事はよほど大事な事なんだね」

「まあな、それに俺たちの力がなければ君をあいつの元に送る事は出来ない」

「だから私達が来たんだよ、それとこれを渡す為に…」

なのはは別世界のなのはからレイジングハートに似た宝石を渡される

「それは…天使の心という君達の世界で言えば、ロストロギアだよ」

「なんでそんな危険なもの私に？」

「ロストロギアだからと言つて危険と決めつけるのは駄目だよ」

「でも強大な力だからその文明は滅ぶんでしょ…」

なのはが聞くとカリムは一つの紙を出す

「なんですかこれ？」

「彼の出世の秘密です」

「なんでこんなものをあなたが…」

「……」

カリムは黙りこむなのはは黙つて読み紙を落とす

「それが彼の本当の出世です…」

「こんなのは嘘だ…」

「嘘じやありません、もう彼は死んでいるのです」

「でも普通に喋れるし、触れることもできる」

なのはが言つとカリムはさらに詳しい情報を出す

「今彼は…もうあなたの知る彼ではありません」

「そんな事関係ないよ、私は彼と生きるそう約束したんだ…」

「あなたの負けだな、カリム…」

スウェンはカリムの肩を叩く

「私に無くて彼女にあるものそれがこの想いといつ訳ですね」

「そう言つ事だな…」

「ならば…手を差し出してください」

「うーん……？」

なのはが手を差し出すと手の中に透明な宝石が現れる

「ハル行でノル」

「必ず二人で来るんだ  
和達は願う。君達の勝利を」

なのは見送られスウェンの持つ場所へと向かう

### 第32話星の断罪者

「（）に…スウェン君が…」  
なのははどんどんと奥へと進む  
「なにもんだおめえ…」  
「（）の奥に一人、魔導師はいませんか？」  
「なるほど…おめえが聖剣士の仲間か」  
目の前に倒れている、化け物は立つ。なのははそれと同時に戦闘態勢へと入る  
「安心しろ俺にもう戦う力は残されてねえ、ただおめえと話がしたいだけだ」  
「話ですか…」  
なのははスター・フォースを降ろし化け物を見る  
「済まねえな。俺の名前はアサルト、元々は君達と同じ時空管理局の魔導師だ」  
「なんで時空管理局の魔導師が私達と戦つたんですか？」  
「元々、俺はある調査でとある世界へ行つていたんだ。だがそこで見た物は積み上げられた仲間の死体だった」  
それからアサルトは続ける  
「俺は何とか逃げた、だが最終的に捕まり、今の俺がいる訳だ」  
「そうなんですか…」  
「彼を助けに行くんだろう、気をつけろよ。奴にはまだ隠された能力がある筈だからな」  
「はいそれじゃお元気でアサルトさん」  
なのはは走つて先を急ぐ。その頃、魔王の間  
「グッ…ハアハア」  
「どうした先ほどどの気迫、もう一度出してみよ」  
スウェンは血を拭きデバイスを強く持つ  
「やはりこれが限界か…」

「まだ戦えるさ」

スウェンは立ち上がりデバイスを構える

「わからないな。何故、そこまで他人の為に戦う?」

「僕の事を認めてくれた。仲間だから…僕も自分の力の限りに守る」

「貴様はもう体を維持するのも辛いのじやないか」

「確かに、でも刺し違えてもあなただけは倒す」

スウェンが言うと赤い刃がスウェンへと刺さる

「グッ…ガハッ」

「痛いか、苦しいかだが所詮それも貴様にとつては作り物の痛み」

ザンゼスはさらに赤い刃をスウェンに向けて放つ

「ぐわあああああああ」

スウェンの左目に赤い刃が刺さる

「スウェン君…！」

なのはは辿り着きスウェンの元へと向かう

「聖剣士、貴様は絶望の中で死んでもらおう…」

「まさか…止めるおおおザンゼス…！」

ザンゼスはなのはに向けて赤い刃を投げるがなのはに当たらず全てスウェンへと当たる

「スウェン君…」

「平氣…怪我はない?」

「うん、君が守ってくれたから」

「ごめん、でももう約束守れそうにない」

スウェンは倒れる

「馬鹿な無駄死にか。いや最初から死んでいるのだから無駄死にではないか」

ザンゼスは笑いながらなのはを見る

「そんなんまだお別れなんてやだよ」

「もうそいつは目覚めない。全ての生物は還るべき場所へ帰るんだ」

「絶対にまだ生きてる筈…?」

「何だこの光…」

なのはとスウェンを繋ぐように光が出る

「聞こえるか…」

「はい、聞こえます」

「その光を先ほど渡した透明な宝石に近づけるんだ」

なのはが言われたとおりにすると宝石が光を取り込んでいく  
「目障りな…消えろ…！」

ザンゼスは赤い刃をなのはに向けて放つが何かに弾かれる  
「何だ魔導フイールドだと…」

「スウェン君、今行くよ…二人なら絶対に勝てる…！」

なのははの意識はスウェンの中へと入る

「なにが起ころうとしている…」

ザンゼスは警戒しながら周りを見ると星が包んでいた  
「何この世界に星など…まさか星魔導…」

ザンゼスは恐れながらスウェンを見ると右目は青、左目は緑。左手  
にはスタートフォース、右手にはクライスソウルが握られていた  
「まだ終わってないよ」

「まさか…貴様ら意識の融合をしたのか」

ザンゼスは驚きながら再び赤い刃を放つが途中でかき消される  
「あなたの攻撃は通用しない」

「もう僕らには…」

「ふざけた事をぬかすなああああ」

ザンゼスはミッドチルダを焼き払つた最大魔法を放つ

「デス・メテオ・インフェルノ…！」

「スタートフォースビッグ・バン…！」

二つの魔法がぶつかり次元が崩壊していく

「なのは、後は僕がやる。だから君は先に帰つてて  
「わかつた。絶対に帰つてきてね」

なのはの意識はスウェンの中から消えなのははもとの世界へと戻る

「貴様は何故、残つた」

「あなたに聞きたい事があるからだ」

「何だ。もう俺は消えるのも待つ身だ」

「星の断罪者について知っている事、何でもいい教えてくれ」

スウェンが聞くと何者かの気配を察知する

「早く行け。お前が捕まる事はないどうしても知りたければここに早く

行くんだな」

「ザンゼス、あなたは…」

「俺は所詮、魔王になれなかつたのさ。それにここから一刻も早く

出て行けう…」

ザンゼスは突如何かを撃たれ倒れる

「あなた達は一体…」

「我々に構わない方がいいですよ。スウェン・レイク

「あなた方が星の断罪者という訳ですね」

「だとしたらどうするんですか？」

スウェンは黙りこむ

「それにあなたにも断罪するだけの罪があるのです。いやあのミッドチルダと呼ばれる世界こそ全ての元凶なのかもしない」

「なにが言いたい？」

「つまりこれからあなた達の行動によつては私達を敵に回すかもしれないという事です」

星の断罪者達はザンゼスを連れて次元の彼方へと消えて行く

「そうです、忘れるところでした。あなたに渡すものがあつたんですね」

「これは…まさかあなた達のボスは…」

「それでは」きげんよう

星の断罪者達は消えスウェンは渡された薬を飲みと体が再構築される

「やはりあの人たちのボスは靈守」

スウェンは崩壊する世界を抜けミッドチルダへと戻る

## 最終話彼を探す旅

あれから一年後ニッードチルダ  
「色々とありがとうございました」  
「気を付けてね、まだ世界は平和にはなっていらないんだから」「わかりました。また会える時を楽しみにしています」  
ロイト、リルは手を振り、自分達の世界へと戻る  
「それじゃ…俺たちも行くぞ、ゼクス」  
「そうだな。まだこの次元世界には悪意があるしな」  
「一人とも、もう行くんですか？」  
なのはが聞くと二人は次元の扉を開く  
「それじゃあな…縁があつたらまた会おう」  
「では…さらばだ！！」  
ゼロとゼクスは転移していく  
「行っちゃったね…」  
「うん、でも彼らは戦い続けるんだよね」  
フェイントの言葉になのはは空を見る  
「私達もこの次元世界が平和になるよう戦い続けないとね」  
「そうだね…」  
二人が話してるとはやてが来る  
「準備はええか？」  
「うん。平氣だよ」  
「それじゃ、行こうか…」  
「向こうでもうみんなも準備してるんや」  
はやてに連れられなのはとフェイントも行く  
「でも私達が抜けて、時空管理局は平氣なの？」  
「でも、この任務はクロノ提督が言つて来たんや」  
「そうだよ。それに私達と守護騎士それにコウ、ユーノ以外は行かないんだから平氣なんじやないかな？」  
「そうだよ。それに私達と守護騎士それにコウ、ユーノ以外は行かないんだから平氣なんじやないかな？」

フェイトが言うと田の前にシグナム達が現れる

「主、準備は整つております。今すぐでも向かえますが…」

「シグナム戦力を半分に分けたいんや、私にコウ君、ヴィータになのはちゃんそれとユーノ君」

「ではこちらはリインフォース、ザフィーラ、シャマル、テスター  
ツサそれに私ですか」

「それが一番バランスがええやろ」

はやてに言われシグナムは了解する

「では主、アギトとリインフォース？はびうしますか？」

「アギトはシグナムとリインは私らと行くんや」

「でも一一手に分かれるとしてどこへ向かうの？」

なのはに聞かれはやは地図を出す

「私らの最終目的地は星降る谷や」

はやては地図をなぞりながら線をを書いて行く

「でも一般的に星降る谷へのルートは機密らしいんや」

「つまり色々な次元世界を回りながら道を探すそう言つ訳だね」

「でも下手をしたら道自体がないかもしれへん。それでも行くか？」

なのはは頷く

「なら決まりやなまづ、私らは星降る世界へ向かう。シグナム達はエルガストへ向かってくれ」

「了解しました」

シグナム達は転移の準備をする

「必ずまた生きて会おうね」

「うん、必ず…！」

フェイト達は一足早くエルガストへと向かう

「さあ行くでなのはちゃん」

「うん行こう！」

なのは達も転移する

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8560m/>

---

星魔導伝説

2011年4月8日16時44分発行